

法學士笹川潔著

大觀
小觀

33-570

法學士笹川潔著

大觀小觀

東京弘道館發兌

明治
29 11 12
東京

著者の述懐

日本といふ國は無法千萬な國で有る、藩閥で無ければ、大臣に成れ無い、藩閥に阿ら無ければ、次官に成れ無い、局長に成れ無い。

大臣は國務の機密に參與するのを好いことにして相場を爲る、御用商人と結托してコンミッションを取る、其れから妾を置く、藝者買を爲る、甚だしきは女郎屋の門前に巡査を見張りさせて、公然と内で巫山戯散らすので有る。

政府の監督の爲に設けられた議會は、政府の都合をのみ謀りて、一向人民の利害といふことを稽へて呉れぬ、何んな悪税でも彼等はオールライトと手を拍つて賛成する、眞面目に調査すら研究すら討議すら爲て呉れ無い。

日本には責任といふことが、恰るで塵芥にも及かぬ位に思はれて居るらしい、政府は幾度も公約を爲る、けれども事實に於て曾て之れを履行

したことが無い、又た履行せぬからとて、曾て大に之を詰責した者が無い。

官吏に非ざれば容易に爵位勳記を授かることが出来ぬ、縦令岩をも動かす程の烈婦が有つても、鬼神をも泣かしむるに足る孝子が有つても、地方官は慣例として先づ壹圓五拾錢の賞典を興ふる位が關の山で有る。

官學に非ざれば容易に身を立てる事が出来ぬ、赤門を僭ぐらねば容易く學位を受くる事が出来ぬ、文官任用試験は有つても、其の目的は人才を登庸するのでは無い、如何にせば仕官の途を塞ぎ得可きといふので有る。

中途半端の教育を施す所の學校は全國を通じて數限りも無いが、扱て高等の専門學校と聯絡を保つ方法は、少こしも着いて居らぬ爲に、青年の志を得無い者は到る處にゴロ／＼として居る、誰れが社會主義を造り出すのか、誰れが厭世家を奨励するのか、誰れが青年の風儀を腐らすのか、人の子を賊ふ者は、何人で有るか、國民の向上を阻害する者は、抑

も何人で有るか。

警察官は白晝劍を抜いて良民を斬り、甚だしきは人を罪に陥れむが爲に、或は恩を售り或は威を示めして、僞證の陳述を強迫する。

立憲政治が行れても、眞この言論の自由といふものが無い、是故に公會演説を催しても、言少しく危激に涉れば忽ち中止解散で有る、輿論政治が行れても眞この社會的制裁といふものが無い、是故に新聞紙の殆んど總べてを傾けて反對の意を表したとて、謂はゞ糠に釘も同然の姿で有る。

男子は女子を捕虜とし、姑は嫁を奴隸とし、資本家は勞働者を囚人扱にする、均しく人間で有る、けれども日本に在りては、人間の價格に著るしい相違がある。

不潔なる三等車と善美なる寢臺車とを聯結して、一組の列車が成り立てる如くに、日本の社會的狀態は、如何にも上下の軒輊が酷だしい、優勝劣敗の効驗が著るしい。

發明家が出て尊重されぬ、天才が現らはれても優遇されぬ、只だ尊重せられるものは、物持ちで有る、只だ優遇せられるものは、美人で有る。

地租は年一年と増騰する、肥料には輸入税が懸かる、着る布子にも、食ふ鹽にも尠なからぬ税金が出る、けれども東京には幾千坪といふ宏大な庭園を山林の名義にして、且つ幾萬の収入を有しながら、總一文の所得税をも拂はぬ者が幾人も居る。

ヤレ一等文明國だ、ヤレ東洋の英國だと煩るさい様に言ひ囃やしたところで、碌に完全な孤兒院が有る譯で無し、施療を目的とする病院が有る譯で無し、國民的借樂を供する劇場や音楽堂が有る譯で無し、貧民の子弟は今も昔も教育を授かる譯合でも無ければ、又た幾百の保險會社が有つたところで、職工や人足の爲には何の足シにも益にも成らぬといふ有様で有る。

斯様なことを挙げ來らば、幾ら書いても果てしが有るまい、要は如何

にも無法な社會、不公平極まる社會で有ることを承知すれば則ち足るので有る、けれども退いて之れを稽ふるに、恠かる社會の出現といふことには、國民亦た大に責任が有る、物平かならざれば必ず鳴る、而かも我國民は平かならずして敢て鳴らざるの感がある。

予は乏しきを社會の木鐸と稱せらるる新聞記者に享け、今現に中央の論壇に日々苦戰惡闘しつゝ有るもので有る、素より蘊蓄の學殖無く、素より絢爛の才藻無し、只だ一片稜々の氣骨を負ふが爲に、此膝當世の權門勢家の前に屈す可からざるを知ると、此不平不快なる社會の狀態を破壊し革正するの希望とに驅られて、忠實に自己の職分を守るべく安んずるので有る、本著收むる所の二十三篇、其の多くは曾て世に公けにせしもの、又た悉く平生の意氣を文書と爲たものでも無いので有るが、既往一年間に涉れる所感中より一般の讀者に取りて、偏せず片寄らざるものを蒐め、自ら操觚者として立てる第一回の紀念といふまでに之れを天下に問ふた譯で有る、星、董を説かざれば以て當世に讀者を得可からずと

爲す者有らば、又た實に何をか謂はんやで有る。

明治三十九年三月五日夜しるす

大觀小觀

目次

- 一、抗爭の意氣
- 二、偶感
- 三、大國と憲法政治
- 四、經濟思想
- 五、伊勢乞食の説
- 六、商業上の道德
- 七、處世觀の一節
- 八、「シエロントクラシ」
- 九、領土擴張論
- 十、露國の國情を研究せよ

- 十一、關東報主筆
- 十二、立國の意義
- 十三、良民の歴史
- 十四、英國選舉界に鑑む
- 十五、自己の領分
- 十六、人類の祖先
- 十七、地久節を國民的祝日とせよ
- 十八、講和會議錄を讀む
- 十九、非擧國一致論
- 二十、蠅の目主義
- 二十一、日本文明史論
- 二十二、第二十世紀式人物
- 二十三、陳るくても尙新らしき疑問

大觀小觀

法學士 笹川 潔 著

抗爭の意氣

人若し金石を撃てば、憂然として聲有るを聴く可し、其聲有るは金石にも抵抗の性有るを證する也、「ウント」の言を藉りて曰へば、抵抗の意思有るを證する也、窮鼠は猫を噛む、是れ渠れの方克く敵を殲すに足らざるを知る也、猶ほ一片抗爭の意氣禁せんぞ欲して自ら禁じ得ざるもの有るが爲のみ、夫れ一寸の蟲にも五分の魂有り、何ぞ况んや六尺の大丈夫兒に於てをや。

福澤先生は温厚篤實の大人也、而して其著に『抵抗之精神』と題する一論文有るを看る、人間抗爭の意氣崇ぶ可く重んず可き、先生と雖争はざる也、昔者藤樹中江先生、一夜郊外に群賊の圍む所と爲り、其佩刀と被

覆と併せ奪はれんとするや、戰而不利、無輕卸以與汝之理と言ひ、刀を撫して賊と雌雄を決せんと期しぬ、願ふに千金の子は盜賊の手に死す可からず、併かも先生の敢然身を挺して事の成敗を問ふに違有らざりしもの、聊か異とす可きに似たりと雖、翻つて按ずるに其の身荷も武人の家に長ず、腰間の三尺固より虚器に非ず、縦合力敵せざるも空しく草賊の爲めに武士の面目を蹂躪し去らるゝは、近江聖人といふと雖、輒ち耐へざる也、是れ人に抵抗の精神、抗爭の意氣を缺くは徒らに生を完うするに比して損する所の寧ろ大なるを信するに外ならず、先生用意の存する所、後人最も學ぶ可き也。

『地に泰平を出ださんが爲めに我れ來れりと意ふ勿れ、泰平を出ださんとに非ず、刃を出ださんとて來れり』寔に平和を愛する者は其前提として破壊を條件とするの已む可からざるを認む、姑息なる妥協、腑甲斐無き屈從、是れ「キリスト」と雖假借せざる所也。

然るに當今の社會は斯の尊重す可き人間の氣魄を忌むこと酷たしく、抵

抗の精神に富む者は則ち妄りに争を好むの徒として斥けられ、少しく不平の氣有る者は則ち其の境遇の致す所として嘲けり疎んせらる、是に於てか今の世比較的人の風上に立つ者の多くは、不審議にも不得要領の人物ならざる莫く、男兒の本領擧げて殆んど泥沙に委せらるゝの觀有るを免れず、慊して以て慨す可き也、仰々國に、兩院の制を設くるは、上院と下院と相對抗せしめんが爲め也、一院毎ねに他院の議決に服せば、初めよりして二院を置くの要有ること無けん、假令妥協と曰ひ舉國一致と曰ふも、其實狀にして盲従たり屈服たる限り、政府の外に議會の存在を認むるは最も無益の事たらざる可からず、「ポリツ」が政黨内閣を評したる語に『多くの弊害は有り、然れども斯制度にして初めて政見の競争を期し得可し、夫れ競争は進歩の母也、政治も亦た不斷の競争無きに於ては忽ち萎靡鎖沈の外は有る可からず』と言へるは、味ふ可きの至言なるかな。

憶ふに國家社會は車輪の轆轤として路上を走り行くが如くならざる可か

四
らず、謂ふ所の意は其の相軋りつゝ有る間に轉一轉前進せざる可からざるを謂ふ也、吾人は言論の自由を有し結社集會の自由を有す、併かも其自由の實用を見ざるこそ今日の如く酷だしきは、又た吾人の未だ曾て知らざる所也。

偶 感

日本の皇室が日本の歴史の心髓にして日本の總べての文明の中心なることは今更反覆するを要せざる所也、事を察するに迂なる者は、日本の開化は該初め三韓より傳來し更に隋唐より輸入し、徳川時代より今日に涉りて歐羅巴亞米利加より移植せられたれば、古より獨創の文明なるもの無しと言へり、萬事が模倣的にして一切が反譯的也と言へり、没分曉も是に至りて程の有り相なものなりと思へど、多くの「ハイカラ」學徒は往々にして斯かる淺薄なる觀察を公表して憚らざるの慨有る也。然れども吾人を以て之れを見れば、二千五百餘年の久しき萬世一系の皇

室を仰ぎ來りしてふ事は、其事其れ自身既に一大文明たりと信する也、何となれば是れ實に一大道義的現象なれば也、忠孝の教を説きたる聖人仁義王道を明かにしたる賢哲は、人類の思想界に不朽の存在を有するに相違無きも、社會の文明上より看るときは、斯かる思想を有し斯かる議論を吐きたる人物の輩出せし國土よりも、事實に於て人類の自ら進んで之れを行へる國家が遙かに價値有る也。

「ベンジャミンキッド」の進化論に、文明を解して愛他的道德の發展に歸着するを論斷せし語の、甚だ卓見なるを承認し得可くば、一朝有事の場合に臨み日本國民の如く皇室の爲に生命財産を献供するの思想に饒かなる者は、其一舉手一投足が文明の爲めにする手段に非ずして既に文明其者と一致せることを知るに難からず。

或者は實戰に臨みて海陸の將卒が單だ天皇の御爲めと稱して屠く討死するを訝み、日本人の宗教思想の餘りに枯淡なるを嘲れども、焉んぞ知らん彼等は斯萬國に比類なき日本固有の一大文明の爲に殉するものなるこ

ことを、二千五百餘年に涉りて繼續せらるる、一大道義的事實の爲に殫るゝものなることを。

夫れ國家は一大偶像に過ぎずと謂ふが如き説は宜ろしく歴史無き國家に就きて言ふ可し、歴史無き國家に就きて聽く可し、我日本に在りては國家は孰れの場合に在りても斷じて偶像に非ず、然れども燃ゆるが如き精神の宿れる處也、人間の神聖なる道德の光が燦然として輝ける處也、而して斯の精神と光彩とは日本に在りて國家の存在と正に終始す、故に日本の國家は如何なる場合の下に在りても決して偶像を以て視るを得ざる也。

頃者歸朝せる一紳士の談に曰く、「ロンドンタイムス」を首めとして外國の新聞紙が、我陸海將帥の奉答文を譯載するに方りて、其最も苦心を感じたるは實に『御稜威』てふ文字なりき、彼等は種々詮考の上漸くにして彼の「イラストリアス、ヴァーチュー」なる熟語を拾ひ來りしも、扱て皇帝の光輝ある美德に由り戰爭に勝利を得たりとのことは、如何なる

意義なりや、此點に付て彼等は復たび頭腦を悩ましたる也、現に「タイムス」記者の如きは古來歐羅巴諸國に於ける古事先例などを調査したる結果、初めて羅馬の帝政時代に將帥が勝利の原因を皇帝の德望に歸せし事あるを發見し、僅に釋然たるもの有りしと云ふ、然るに羅馬に在りては將帥の帝德を頌揚せしは常に捷利の場合に限られ、若し一旦戰不利に了り敗北の已むを得ざるに迫んでや、一に之れを以て皇帝の不徳に歸して顧みざること寧ろ慣例として目せらる、是に於て彼れ外人は今尙眞に『御稜威』に由りて勝利を得たりとの我奉答文の精神を領解せず、想へらく日本は開戰以來連戰連捷の勢なるを以て、終始『御稜威』一點張を以て貫くを得可しと雖、若し一朝日露勝敗の地位を轉せんには、日本の將校は其失敗の責任を皇帝に歸せんこと其れ猶羅馬古武士の敗因を帝王の不徳に嫁するが如くなる可しと、彼等操觚者の心底を叩くに、蓋し未だ斯疑念を脱するの域に達せざるものゝ如き也と。

是れ寔に一片卓上の瑣話たるに過ぎざるも亦た以て日本に於ける皇室と

臣子との關係が白人の想像外に美しく麗はしきもの有る一個適好の反證と爲すに足る可き也、乞ふ餘りに外國の思潮を崇拜すること勿れ、彼等の倫理思想は斯くの如く日本人間に在りて尋常朝飯前の事すら完全に之を解識し得るの資格無きに非ずや、日本の學者日本の經世家中には、彼等の如く餘りに眼孔炯々たるに過ぎて、却つて白晝一物をも視出だし能はざるの徒甚だ多し、吾人濫りに泰西の文物を排斥し去るものに非ずと雖も、今日の如き機會に方りて我朝野の識者が少しく自國の特長につき回顧せんことは、日本文運の將來の爲にも頗る有益にして且つ大切な注意たるを信じて疑はず。

大國と憲法政治

立憲政治の最も進歩せる政治にして又た學理上國家統治の最良手段なることは、今更ら嗚々の辯を俟たざる所也、故に學者は講壇に立ちて此政治に非ざれば以て今世國家の秩序と安寧とを保つ可からざるを説き、俗

人は此政體を樹つるに非ざれば以て今世文明國の班に列す可からざるものゝ如く思料す、素より其言ふ所其觀る所共に非なるに非ざる也。然れども立憲政治が國家統治の最良手段たりと曰ふは、其前提に豫め何等かの條件を必要とすること無きや、有體に言はしめば立憲政治の妙用は獨り地理上の意味に於ける小邦に限らるること無きや、吾人は之れを以て確かに一疑問なりと思ふ也。

蓋し吾人の所見にては、歐羅巴と曰はず、南北亞米利加と曰はず、是れ迄立憲政體を樹立し憲法政治を運用し來れる一切の國家は孰れも決して彼地理上の意味に於ける大國てふものに非ざるが如し、今日の英帝國は日輪未だ曾て没せずと稱ばるゝ廣大なる領域を有すれども、憲法政治は汎く全帝國を一括して行はれ居るに非ず、本國には本國の議會あり、殖民地には殖民地の議會ありて、其實政治上の領域は無數に小分されつゝ有るに過ぎざるなり。

若し夫れ其他の諸立憲國に在りては領土濶しと雖も大凡限りあり人口多

こと言ふと雖も自から程度あるなり、例へば全歐羅巴を一國とし、全亞米利加を一州としての立憲國の如きは、勿論吾人の未だ聞かざる所なると同時に、又た想像だも曾て及ばざる所也、「シーザア」の天下は濶かりしも「シーザア」は之を治むるに今日の所謂憲法政治を以てせざりき、「シアレマン」大帝の國家は大なること今の西歐を一握したるに由りて知る可きも、然かも彼れは之れを御するに憲法政治を以てしたるには非ざりしなり。

寔に立憲政治の最良なる政治たるは吾人の須臾も之れを疑はんとする所に非ざるも、所謂大國を統御するの道とし、數百萬方哩の國土と一億以上の人口とを司配するの手段としては、吾人未だ此政治の小國に於ける場合と均一の好果を收め得可きものなるや否やを判別するに苦まざるを得ず、吾人は實際大國の立憲政治なるものに付て未だ一の經驗談すらも承知せざれば也。

然らば知る可し、露國が今將さに其帝王專政を改革して二百萬方哩の領

域（姑らく西伯利亞を除く）と一億六百萬の人口とを司配せんが爲めに、英本國の如き、白耳義の如き、瑞西の如き、露國より見れば其幾十分の一とも言ふべき小邦に發達したる制度を採用し、之れに依りて全帝國を保全し其運命の向上を期待せんと企つるが如きは、是れ如何にも第二十年世紀劈頭の輕業的計劃と言ふ可きに似たるを、人或は露國に憲法政治採用の傾向あるを看て彼れが爲めに其國政の一進歩なる如く思料するものあれど、露國たるもの此くの如くして其尨大なる國家を保全し得べきやは實に一問題なりと謂はざる可からず。

將た近年夥だしき清國留學生の争て日本に來遊し、薙て法制の學を攻究するの風ありと雖も、是れ亦其修むる所のものは所謂小邦の制度に外ならず輒ち之れに依りて全歐羅巴よりも廣大なること三十六萬方哩、全歐洲人口よりも饒多なること五千五百餘萬の大帝國をして政治上の新生面を開かしめんとす、吾人は敢て絶對に不可能と明言せざる可し、但だし如何にも其難業たるを慮る也、夫れ支那を保全するに學術を輸入し教育

を普及するの急務なるは吾人素より同意同感たりと雖も、獨り法制の一
事に至りて、其前途の効果を豫言するは蓋し容易の談に非ざるを覺ゆ、
願ふに露西亞の如く支那の如き、餘りに尨大なる邦土に在りて其現狀を
一變せずして能く憲法政治の適用を期待せんことは、洵とに今世紀に於
ける興味ある一問題なりと謂ふ可し、而して若し竟に立憲政治の斯かる
大邦に施す可らざるを斷言し得べくば、曰く露國の將來は分裂あるのみ、
曰く支那の前路は瓦解あるのみ、一は則ち以て慶す可く、一は則ち以て
弔す可き也。

經濟思想

今を去ること十數年前一時科學思想なる語流行す、當時之れを鼓吹せる
者の説く所によれば、古來本邦に科學といふ可きもの無く、又科學的發
明品の之れぞと取り立てて特に稱するに足るもの無かりしは、畢竟日本
人の科學思想酷だ振はざるの效たす所たらすんばあらず、就ては今後の

社會は深く此に鑑むる所有りて、先づ科學思想の養成に努め、斯思想を
して汎く國人の間に普及せしむるの注意勿かる可からず、夫れ高きに昇
るは宜ろしく卑きよりすべし、科學思想の養成も亦須らく少年少女をし
て其日夕觸目せる事物に付て漸次科學的觀察の趣味を會得せしむるに如
かず、成る程『白扇倒懸東海天』と吟ずるも富士山に對する觀察の一法
たるに相違なけれど、斯かる文學的觀察のみにては科學の勃興固より期
待し得らる可きに非ざるが故に、世の教育者たる者は其子弟をして例へ
ば山に對し其海拔幾萬尺なるやを問ふの念を起さしめ、或は其活火山な
るか休火山なるかに留意する所あらしめ、或は又其氣壓に對する關係の
如何なるもの有るかに着目する所あらしむ可き也、此くの如くして後始
めて國民の科學思想なるもの鬱然として勃興せん。

抑も此説たる當時の社會に在りては確かに金言たるを失はざりき、今日
日本人にして動植物學上或は星學上或は地震學上或は又た醫學上等に於
て西哲未知の新事實を發見し、若しくは又火藥銃砲無線電信器潜水艇紡

績機械類を始めとし大小の利器に改善を加へ或は全然新發明品を案出しつゝあるが如きは、要するに皆科學思想の漸く邦人の間に傳播せられたる結果に外ならず、此點に於ては當年の東洋學藝雜誌の如き、及び之れに従事せし幾多の學徒の如き、將た或は彼日本風景論の著者の如き、其功勞意外に大なるもの有りと言ふ可き也。

然りと雖、科學思想を鼓吹するの時代は最早や過去と爲れり、今日の教育者は子弟を率ゐて郊外に遠足を試むるに方りても、獨り其詩想を啓發し其歴史的觀念を鼓舞するに止まらず、又實に物理上博物學上若くは化學上の觀察をも叮嚀に紹介するの用意を缺くこと無きに至れり、但し此に吾人の窺かに恨事とするは、思想界の進歩既に此くの如くして併かも未だ經濟思想の甚だ振はざること即ち是れ也とす。

今や日本人の眼前には戦後經營の問題横はれり、將來如何にして彼巨額の軍債を償還すべきやてふ大問題横はれり、如何にして列國を凌駕して東亞の商權を掌握すべきやてふ大問題横はれるなり、抑々英佛戦争後

英國の愈々雄飛し、普佛戦争後獨逸の益々盛運に嚮へるは、其原因種々有る可しと雖、吾人は其主因として先づ指を經濟學の勃興に歸せざるを得ず、看よ「アダムスミス」は英佛戦争の眞最中に起れり、次いで「リカルド」、「マルサス」、「ミル」等の諸學究顯はれ、斯くて始めて「マンチエスタアスクール」なるもの次第に英國の財界を風靡し來りしに非ずや、將た彼の所謂獨逸學派なるもの由來に就て稽ふるも、是れ亦戦後の産物たるを知る可きに非ずや、世間或は種々の事實を引證し來つて英獨諸國の戦後に於ける繁榮の實相を究めんとする者有るが如しと雖も、若し、斯の一大原因たる經濟學上の進歩を算外に置くこと有らば、開は恐らく淺見の甚だしきものたるを免れじ。

去れば日本の前途に横はれる政治上經濟上の大問題を解釋するに當りても、當面の急務とする所の必ず經濟思想經濟學理の發達を獎勵するに在る可きは殆んど多辯を俟たざる所たる也、併かも不幸にして吾人は未だ斯思想の汎く國民の間に普及せられたるを認むる能はず、學校の教科書

には科學上の事項は極めて豊富なりと雖も、遂に吾人が日々常食とする米飯の如何に不經濟なる筈によりて焚かれつゝ有るやを反省せしむるの注意すら興ふるもの有るを見ず、人は依然として鐵砲風呂を使ふも教育家は毫も之を異まず、父兄は其子弟を戒むるに方り唯だ「費ふ勿れ」といふのみにて、曾て「儲けよ」と誨へざるも積極進取の時勢に不似合の觀念なりと慨するもの無く、山に對しては海拔一萬尺を曰ひ氣壓の如何を云爲し其休火山か活火山かを論ずる者は有れど、之れを避暑地とするが爲めに國富を増すと云ふが如き、或は開墾して牧場を拓き森林を植ゆると云ふが如きに至りては尙ほ深く當世の少年少女によりて注意を拂はれつゝ有りとしも覺えず、路頭に食を乞ふの乞食に向て惻隱の情を起せる兒童の話は修身の教科書などに折々散見せらるゝことなれど、此乞食の如何にして生じ來れるやに付ては説明を缺き、如何にして之を憐れむべきかに付ては其方法を誨へざるを例とする也、斯くの如くして獨り國民經濟の振作を期し國家富源の開發を待たんとす、是れ本末を解せず

るの議論たり、徒らに難きを社會に強ゆるの無理注文たり。仍つて吾人は今の經世家教育家に忠言す、卿等若し眞に戦後の經營を念とせば、先づ須らく國民教育の根本に於て經濟思想の普及を計るに銳意なるべし年少の男女をして森羅萬象に對し經濟的觀察の趣味を感享せしむること猶宜ろしく山川草木に對して科學的觀察力を養へるが如くすべしと、高きに昇るは卑きよりす、吾人心竊かに此忠言を以て當世急務の存する所之れに過ぐる莫きを信せずんば非ず、世の識者幸ひに熟察する所有る可き也。

伊勢乞食の説

俗に伊勢乞食の稱有り、之れを解する者は曰く、伊勢は諸國の道者麇集するの地也、是を以て國人偏へに生計の基礎を他人の懐に置き、國を舉げて動もすれば、勞せずして寄食するの風無しとせず、彼の稱呼は蓋し之れを卑むの意に出でし也、と。

今や日本の經濟家にして、國家將來の富源を論ずる者、萬口皆な疾呼して曰く、吾國は山紫に水明かに、其風光は實に坤輿に冠絶する所也、以て世界の公園とす可く、以て天下の遊覽地とす可し、而して其來りて筈を斯樂土に曳く者、一人にして散ずる所僅々一千圓に止まるとするも、一萬の觀客は優に以て年々一千萬圓の資源を供するに足り、若し其散ずる所之れに倍すれば則ち以て二千萬圓の巨額を收むるに足る可く、更に全國の勝地を脩飾し、旅館の設備を改善し、因りて以て彼れ等の財囊を吸引するの策を講じ、一面又大に外客の渡來を勸奨するを得ば、或は之れに據りて一億以上の收入を贏ち得んと敢て必ずしも難じとせず、請ふ試みに之れを瑞西に看よ、將た之れを伊太利に徵せよ恐くは思半に過ぐるもの有る可きなり、夫れ日本の風景と云ひ、古來傳存の美術品と云ひ、此等二國の其れに優る有るも、斷じて劣れるを認めず、而して國人未だ之れを利導するの道を知らざるに至てば愚の最も酷だしきものと謂ふ可し、宜ろしく這次の大戦に伴ひ本邦の聲名世界に喧傳するを機とし、

爾今大に力を外人吸集策に用ゆ可く、必ずや非年ならずして、彼國債の利息の如き之れを給するに於て綽々餘裕あるを見るに至ると同時に、増々力を此の方面に澆ぐ有る、他國の競及し得ざる最も堅實なる一大財源を國家に供するの媒介たるを得可き也、と、是れ豈日本國民を擧げて所謂伊勢乞食一輩の徒たらしめんとするの説に遜からずや、

然り吾人と雖、素より風光の經濟上侮る可からざる價值あるを知る、本邦幸に山水の明媚なる有りて、歐米の觀客を吸引するに足る可き有らば、斯勢を利用し、國家の資源を増殖するに於て、些かも之れを妨ぐるの要を看ざる也、夫れ然りと雖、日本は瑞西伊太利の國家經濟に見て、直ちに之れに倣はんことを希求する勿れ、世界の公園を以て天下の遊覽地を以て、立國の大本と誤解すること勿れ、巴黎に遊ぶ外人は知らず識らず流連し、東京に來る洋客は殆んど無聊に窺むもの有るにせよ、斯くの如きは寧ろ我國人の多く介意を要する問題に非ずとす可し、吾人は風光より生ずる利得を以て國民の内職と視做し國民經濟の片手間と爲すに於て

異論なきも、首都を擧げて一國を擧げて、淺草の奥山たらじめんとするの議論に至ては與みせず、黨せざる也、他人の懐を當てにする國民は卑屈なる國民也、天然に倚賴するの國民は遊惰なる國民也、日本人は寧ろ英國人の如からざる可からず、寧ろ、獨逸人の如からざる可からず、海を觀ては則ち遊船を泛べんとするの思想を抱くに前ちて先づ漁業隊を繰出すの觀念を抱かざる可からず、山に入りては則ち避暑の天幕を展ふるの考案を凝らすに前ちて先づ水力電氣を起すの計畫を運らざる可からず、縦令數億萬の大金が觀光の外客より日本人の財囊に流入せんとも、吾人何爲れぞ僅々數萬の外人を菲客とし、卑屈なる經濟政策に甘んずるの國民たるに堪へんや、吾人の國する日本は幸に瑞西の如く八方塞りの小乾坤に非ず、而して其四面開濶の大天地たるだけ、吾人の取る可き經濟政策は必ず當さに雄大なる性質を負ふるものたらざる可からず、山水經濟論稍聽く可きも、伊勢乞食の根性は斷じて排するを要す。

商業上の道德

僧正「オウドレー」博士が日本人の性格と題する論文に於て、日本人の商業道德を非認したる一事は吾人之れを「タイムス」紙上に一覽し、又た十月五日附を以て、同紙東京通信員が「エンサイクロペデア」の日本に於ける成績を引證して英國人の「オウドレー」博士に誤らる可からざるを戒めたる公開狀は吾人之れを同月十三日發行の「タイムス」週報に於て一讀したり、吾人は好んで此益友の忠告に反對し若くは其の特に日本人の爲に爲されたる辨護に向つて批評を加ふるものに非らざれども、由來商業上の道德なるものに付きては、特殊の觀察を有するが故に此機會に於て少しく生平の持論を公けにせばやと思ふの念に驅られ茲に卑見の一斑を叙述することと爲せり。

吾人の信する所に由れば、商業上の道德なるものは、習慣の問題にして、性格の問題に非らず、智識の問題にして真正なる道義上の問題に非らず、

吾人は常に西洋酒の壘詰を取りて其底を見る毎に一種の感に打たる何故に爾く内部に向て凹み居れりや、とは吾人の居常理會に苦む所の問題也、而して吾人は不幸にも今に至るまで、其説明を聴くこと能はず、然れども若し常識の判断を以て之れを解釋するを得せしめば、是れ必ず商人の狡計に由來せしものならん、否恐くは事實亦た然らんと思料せらる、即ち今日信用を重んずる泰西の社會と雖も其古に溯れば、狡獪なる商人は此くの如き容器によりて酒量の幾分を節せんと企てしこと争ふ可からざるが如し、是れ寔に一事例を擧げたるに過ぎずと雖、所謂商業道德にして其國民の性格上より來る問題なりせば、今日の洋人が其祖先に此の如き商人を有せしことは殆んど解説し得られざるの現象たる可し、然り國民の商業的道德は必ず性格の問題に非ずして習慣の問題也、道德の問題に非ずして知識の問題也、

試みに猶太人を見よ、支那人を見よ、彼等は果して道義的性格に秀でたる人種なりや、何人も恐くは然りと答ふるに躊躇す可し、然かも此二人

種は信用の重んずべきを解し、所謂商業道德の貴ぶ可き所以を了會しつゝ有り、是れ抑々何に由りて然るか、他無し、信用を重んずること、之れを重んずるに比して、ヨリ大なる利益を興ふればのみ、商業道德を守ることが之れを破るに比して、ヨリ都合好き身上を造り出たせばのみ、由來真正の道德なるものは、其觀念に於て報酬を伴ふものに非ず、縦しや天柱折れ地軸碎くるも正義は即ち正義たりといふもの、是れ眞どの道德と稱すべきもの也、彼の善には善の果報あり惡には惡の果報ありといふが如きは、實は道德に寄せて世渡りの方便を説示せしものに外ならず、眞の道義性は必ず絶対也、相對には非ざる也、然れども商業上の道德なるものは、其基礎に於て利益を條件とするものにして、決して、眞正の正義的觀念に由るものに非ず、日本人が商業上の道德に缺乏するは其性格の不道德的なるに非ずして、實は未だ利慾の思想に疎きが爲めのみ、目前の利益に驅らるゝは、永遠の利益を收むるに比して、極めて迂愚なることを充分に了會し得可き地位に達せざるが爲めのみ、是れ實に道義

の問題に非ずして智力の問題也、支那人の此點に於て日本人に優るもの
 有るは畢竟一は其積習に基き其經驗に徴して今日の立場を維持するの賢
 なるを確信し居るに原因す、彼れが商人の君子にして我れの小人なるに
 非ずして、彼れの賢たり我れの愚たるに止まるの問題也、吾人は信ず論
 點は正しく此にありと、憶ふに歐米の商人と雖、其の所謂商業的道德な
 るものは必ず彼れが智力上の判断によりて得たる結果なることを否認す
 る能はざる可し、「オウドレー」博士が日本人の性格を以て商業的道德を
 守るに適せずと断定するは、吾人此故に與せず、將た又た本邦の識者が
 往々にして士魂商才の語を口にするも商業の目的は利益に在り報酬に在
 ることの争ふ可からざる以上、士魂と商才とは其本來の觀念に於て、兩
 立す可からざるものにして、商才は獨り商魂に伴ふ可きを洞破し得ざる
 者也、唯だ要は此商魂なるもの、改善に在り、切言すれば、寡慾なる者
 をして大慾ならしむるに在るのみ。

處世觀の一節

司馬子は貨殖傳に於て、瘦我慢の畢竟爲す無きを諷し「セシルロージ」は
 先づ富を得ずして事を爲さむと欲するの、斷じて空論なるを戒めたり、
 其言ふ所一概に棄つ可からざること勿論也、然りと雖、富を獲ると學を
 修むるとは同じからず、産を造ると詩を作るとは均しからず、人若し財
 界の天才を以て、彼れが能力をして始めより學藝に傾けしめば、彼れ亦
 た一方の大家たり、藝宗たるを得可しと念ふに至りては、即ち謬まれる
 の甚だしきもの也。

學者の倚賴する所は、單に腦髓に在り、詩人の恃む所亦た此を出でず、
 然りと雖、富を獲んとする者は、獨り自己の腦髓に賴るを以て足れりと
 すること能はず、智者必ずしも産を興さず、賢者必ずしも富を致さず、
 蓋し資財は萬人の手中に在り、富豪は便ち之れを彼等の手中より收めて、
 自己の懐に投ずるの術を講せざる可からず、而して其の收むるや、詩人

の自然に於けるが如くならず、學者の森羅萬象に於けるが如くならず、決して無主物を目的とするものに非ず、無盡藏を對手とするものに非ざれば也、是故に僥倖有り、不時の好運有るに非ざれば、富は期す可からず、身代は容易に興らざる也、何人も「ロックフェラー」たり「ヴァンダビルト」たる可しと思ふは、我れに「ミルトン」たり「マコーレー」たるの自由を有すと謂ふよりも、其の實放言の大なるもの也。

昔者、山崎闇齋の會津侯に見ゆるや、臣に三樂有りと言ひ、就中其の最たるものは、幸に卑賤に生れ、侯家に生れざる是れ也と曰ひき、恰かも基督の「貧しき者は福ひ也」と曰へるに等し、卑賤に生るゝの幸福なるや否やは、必ずしも疑無しといふ可からず、然りと雖、人間處世の第一義は、富を獲んと努むるよりも、先づ貧に安んずるに在り、貧に安んずるは則ち貧を懼ざるの謂也。

吾人、固より妄りに富を排せよと言はず、人若し幸に富を捉ふるの機會有り、匹夫一躍して王侯に肉薄するを得ば、又た素より求めて之れを回

避するの謂れ無きを認む、但だし斯くの如きの機會は、所謂運賦天賦に屬するが故に、豫め之れを恃むて徐ろに將來の事業を劃せんとするが如きは、必ず失計の始たり、遺算の基たらざるを得ざる可し、吾人は富豪となりて而して後ち事を爲せとの訓に先ち、貧に安んじて業に従ふの寧ろ捷徑たるを覺ゆる者也、蓋し人にして苟も貧を懼れば五十年の生涯は徒だ齷齪たること蟻蝼の如くして了る可きを以ての故のみ。

今の青年を視るに、學校を出づれば、先づ營々として職を争ひ、既に職を獲れば權門富貴の女を娶らんことを念ひ、而して其の相會して語る所の者は、或は官位の高下、或は収入の多寡と謂ふが如き、士君子の聽くに忍びざる談柄に非ざる莫し、其の或は學徒を以て自ら標置するの輩と雖、求めて俗務に携り、學術の切賣に奔走し、役として研學の暇を割き、以て之れを蓄財の方途に供せんことを冀ふの態有るを免れず、白石の見識、徂徠の抱負、絶えて見ざる所也、豈又浩嘆に耐ゆ可けんや。

莊子に曰く、貧者士之常、死者人之終也、處常待終、當何憂哉と、言聊

か奇矯に渉るの嫌なきに非ずと雖も、古人の意氣亦以て重んず可からずや。

ジエロントクラシー

老人政治是なるか少壯政治非なるか、古「スバルタ」の政權は二人の王と三十人の議員とより成れる「ジエラシア」なるもの之れを握れり、其議員は孰れも六十歳以上の高齢者に非らざれば資格を具備する者とは視做されざりき、是れ實に「ジエロントクラシー」即ち老人政治の濫觴たりし也、爾後歐羅巴には久しく君主專制の政行はれ容易く人民の政治に參與するを許るされざりしかば、縱令年齢を資格の主要條件と爲さざりしとは言へ、大臣顯官の徒は概して年長者多く事實に於て一種の「ジエロントクラシー」たるの觀有るを免れざりし也、然るに近世立憲政治起りてより國民は俄かに選舉權を享有するに至りぬ而して其有權者の大部分は固より何れの國に在りても、老人に非ずして寧ろ年壯者なるが故に、

政治の中心は茲に一轉して次第に少壯者の手中に移れり、米國先づ少壯政治の模範を示し、次いで佛國之れに倣へり、普佛戰爭の終に於て佛國の休戚を双肩に擔ひし「ガムベッタ」は當時僅かに三十二歳の青年に過ぎざりしこと人の能く知る所なるべし、尙千八百八十七年中偶々佛國に於ける一顯官の葬儀に臨み、時の内閣員某は閣員中の年長者なりとて祭文を朗讀したるが、其人は齡實に四十六歳に過ぎざる壯漢なりき、以て如何に佛國政治家の少壯なるかを察するに餘り有る可き也、但だ英國は由來保守主義の國家なるが故に多少老人政治に傾くの嫌なきに非らずと雖、併かも之れを普露西に比するときは、尙大に少壯者の手腕を揮ふに餘地有るの國家たりと言ふを妨げず、「グラッドストーン」は久しく鶴髮の宰相たりき、されど彼れは、「ジエロントクラシー」は予の排斥する所なりと云へり、獨り獨逸の政治組織と其建國の偉業より生ぜし精力とは、今代の泰西諸國中に在りて殆んど唯一の老人專政國を現出するの觀無からず、是れ寧ろ異例と稱するも敢て不可無き顯象たるが如し、我が日本

は日清戦争前に在りては、左まで老人政治と言ふ可き程の特徴を存せざりしも、最近十年間國家の政柄を掌握せる者主として、一部の階級に偏せしが爲め、其結果一種の「ジエロントクラシー」を胚胎し、元老先づ國家の樞機に參與し、内閣員亦た多くは「スバルタ」の所謂「ジエラシア」の議員たるに近く、而して衆議院書記官長の調査せし所として傳へ聞くが如くば、我議員の平均年齢も亦た前期に比して増進し、其大半は實に五十歳以上の中老を以て満たさるといふ、老人政治是なるか、少壯政治非なるか古來學者の間には政治學上の一問題として二者を比較討議せし者必ずしも尠なしとせず、現に「ポリウ」の如きは、其共に一得一失あるを論斷し、老人政治は賢才の進路を妨害するも、經驗なき少壯政治家に由りて屢々蒙る所の危害を免るゝの利益有るを數へ、佛國政治の獨逸に一着を輸する所以を述懐せしこと有り、夫れ然りと雖、獨逸の政治家は天才なりき、其政治は老練なる經驗によりて行はれたるに非ずして、偉人の頭腦に創造せられたる幾多の斬新奇抜なる考案に由りて、導

かれたるなりき、「ポリウ」が此れを以て一般の老人政治を律せんとするは、吾人其の獨斷に失するの虞なきやを疑はざらんとするも得ざる也、憶ふに一國の政治家なる者は如何なる老巧の宰相と雖、其の一生を通じて數次重大なる國家の事件に關與せる者は極めて罕れ也、殊に一國の安危興亡を賭せる大戦争若くは戦後の經營といふが如き絶大の問題に關しては、何人も無經驗なるを常例とす、此の時局に際しては唯だ宜ろしく天才獨り政柄を執る可し、老人の故を以て國勢を委託す可きに非ざる也、請ふ我日露戦争の終幕を視よ、日本の「ジエロントクラシー」は翹だに由來賢才の進路に當つて鐵條網を横ふるのみならず、又た實に國家に測り知る可からざる危害を加へんとせしに非ずや、口に政界の刷新を唱ふる者先づ我當面の問題とする所の必ず老人政治の因習を艾除するに在るを忘るゝ勿くんば則ち幸也。

領土擴張論

古今を通じ東西に涉りて人類の地平線上に嶄然頭角を擢んじたる者が、期せずして互に墨守せる一種不審議の黙約有り、勢力の發展是れ也。領土の擴張即ち是也、英雄崇拜の可否は姑らく之れを別問題とするも、英雄は兎に角人間社會の精華也、天が製作せる人類中の「マスタアピース」也、彼等の見地は少くとも一步を時人に超越せしものたるを疑はざる也、而して彼等の世に生まれ彼等の事を爲さんとするに方りてや、必ず毎に其の理想を領土の擴張に置き勢力の扶植に求む、奇と謂はざる可けんや、然り奇と謂はざる可からずと雖、單に之を偶合と認むるは恐らく非、蓋し何等か其間に熟味す可き意義の伏在するに非ざるよりは詎んぞ此の如くなるを得んや、吾人は學ぶを要す、宜しく彼等の理想に就て着目一番するを要す。

「ナポレオン」戦争に苦るしめられたる歐羅巴は一時羨に懲りて脛を吹けり、領土の擴張は文明社會の罪惡なりと思へり、「ナポレオン」畢世の事業は其砲煙の散じて跡形もなきが如く絶對に無意味なるものとなせり、

然れども是れ妄斷なりき冒認なりき、現に幾も無くして列國皆な領土の擴張を以て復び其の國是とせざる無きに至りし也、所謂帝國主義なるもの是れ也、但だ古と今と相異なる所は、其政策が一人の英雄兒によりて認められたる多數の國民によりて認められたるの差あるのみ、領土擴張の國家に取り民族に取り最上の政策たるに至りては即ち一たり。

今日の社會主義者は帝國主義に反抗すること甚だ熾ん也、固より一理無きに非ず、然れども細さに之れを吟味するときは、實は其方法に關して異存を挾む者也、主義其者を排するには非ずと謂ふ可き也、何となれば帝國主義は其根據とする所國民の膨脹に在り、内に人口の過剩よりして食料供給の缺乏を齎らすことの必ず民族を驅て塗炭の地に墜せずんば已まざる可きを慮るに在るが故也、便ち其期する所は均く是れ人類の福祉に在り幸榮に在り、此れを措きて他に何者も有る無き也、然れども特に記す可きは世界の面積に限りありて人類の繁殖には則ち局まり無きこと、是れ也、是に於てか國家なる制度の下に人類の一團を成す以上、總べて

の種族に先んじて團體の生存發達を圖らんが爲に、土地の獲得即ち領土の擴張を期せざるを得ざるは甚だ明白の事理たり。

夫れ然り然るを斯く觀易く解し易き事理にして猶且つ今日の所謂社會主義者が之れを容認するに遲疑する者は、彼等の崇拜し歸依せる「カールマルクス」たる固と是れ一個の猶太人に外ならずして、其眼中に國民なく國家無かりしが爲のみ、「マルクス」の衣鉢を傳へて社會主義の本場を以て目せらるゝ獨逸帝國なるものが帝國としての歴史餘りに短く、隨て其國民たる國家的觀念に乏しくして地方的觀念に富みたるが爲のみ「マルクス」の資本論は「アダムスミス」の富國策に基くと云ふ、彼れは獨逸を去りて英國に客遊し其際専心經濟學を學べり、而して富國策に「スミス」が勞働を以て富の一切の原因と爲せるを看、是れ眞理也と叫べり、而して更に驟然として破顔一笑して曰く「スミス」は未だ眞理の半面を解せるに過ぎず、勞働既に富の原因たらんには富は當さに勞働者に屬せざる可からざるの理也、好し我れは是れよりして「スミス」の忘れたる

他半の眞理に付て提唱する所有るべき也と、資本論は此くの如くして成れり是れ猶可也、然れども彼れは自己の論調に驅られ、遂に其結論に於て世界の勞働者よ結合せよと言へるに至りて、知らず識らず猶太人の境遇に支配せられ歴史と國家とを忘るゝに至りし者也、今日の社會主義者が帝國主義に反對するを以て吾人が其社會主義本來の思潮に左右せられたる結果に非ずして正しく猶太人の根性に感化せられたる者也、と云ふは是故也、然らば則ち知る可し、領土の擴張は未だ決して何者に由りても實際否認せられたる政策に非ざること。

日本の面積は日本將來の人口に取りて餘りに狭きに過ぐ、日本は如何にして領土を擴張せざる可からず、是れ日本の國是也、日本の宏謨也、日本の對岸には支那有り、朝鮮有り、然れども其國土は亞非利加の如く濠洲の如く不毛の地域に非ず、業に已に長日月の歴史を有し、數百萬乃至幾億を以て數ふ可き人類の現に栖息せる場所たり、支那は貿易の華客たる可きも日本人の植民地に非ず、朝鮮は目下其人口七百餘萬と註せら

なきものは西伯利亞を措きて求む可らず、此地域程列國の利害關係に薄くして我膨脹政策の基礎を樹つるに便利なる土地は斷じて之れ有らざる也、更に僥倖なる哉天佑なる哉、今や此西伯利亞の領主たる露國は我れに向て戦を挑み、而して戦ふ毎に連敗し、竟に和議を乞ふに至れり、是れ實に第二の條件が期せずして到來せるものと謂ふべし、日本人たる者大に斯機會を利用し、大に版圖を擴張するの覺悟勿かる可けんや。

人或は和諾の條件として最も重きを償金に置かんとするもの有り、償金甚だ可也、然れども露國より償金を收めんと欲せば成る可べく一時拂の方法を取らざるを得ず、是れ彼に償金の擔保として指定すべき好物件無ければ也、然れども償金の一時拂は日本國內の金利を暴落せしめ其結果資本を外國に流出せしむるの虞無しとす可からず、寧ろ若かす最も重きを領土の割取に置き此機會に乗じて成るべく多くの土地を割かしめ置かんに。

夫れ曩には獨逸宰相の滿洲を以て英獨協商の範圍内に在らずと宣言し未

だ曾て之を取り消さざるの事實有り、滿洲已に然り況んや更に一層世界の中心に遠かれる窮陰一帶の西伯利亞に於てをや、而して其他の列國と雖、日本の如く滿韓の爲に干戈を辭せざるの意氣込有る者絶無なるに於て、更に湖北の荒野に向て利害を主張し是非を力争する者無きは固より自明の理といふべし、果して然らば日本が露國の領土に向て戦勝の權利を設定するは、最も安全にして且つ最も利益ある方法なりと謂はすんば有る可からず、抑々彼の近時浦鹽斯德の明渡を以て甘心せんとする説の如き、然らざるも東洋平和の保障を得るを以て満足せんと曰ふが如き、要するに皆な戦争の消極的效果を主張するに過ぎずして未だ些かも斯空前の大戦に伴ふ積極的效果を問はざるものに似たり、大局を達觀して日本將來の大計を立てんとする者如何んぞ痛恨なきを得んや吾人は是に於か慨然として領土擴張論を作る。(卅八年六月記)

露國の國情を研究せよ

露國政事家が日本の情勢に通せざりしは疑も無き事實なりき今を去る十年前に於て露人「マクシモフ」が著はせし『太平洋に於ける吾人の問題』と題する書中には日本人の勇敢にして且有爲なること、未來永劫之を敵とするの斷じて不可なること、日露提携せずんば露國の太平洋に志を伸すは殆んど不能なる可きこと等細大説破して剩す所無かりしと雖十年後の今日、局に當る彼れが在廷の權臣を首めとして操觚者論客の徒に至るまで、其識見遠く斯の炯眼なる一著作者の其れに迨ばず、皆な謂へらく海上の小國與みし易きのみと、愆くの如くして「アレキセーフ」先づ飽く迄日本に戰意無きものと誤想し、「クロバトキン」亦日本の實力は到底二十萬以上の出兵を爲すに耐へずと妄斷しき、固より彼れに在りて戰敗の原因一二にして盡きざる可しと雖も、之を要するに敵國の情勢を審かにせざりしこと其有力なる一理由たりしを疑はず知識の欠缺豈懼れて戒めざる可けんや。

夫れ然りと雖も敵情に迂濶なりし者何ぞ必ずしも獨り露國人のみと謂は

ん、我當局者亦た已に然り我國民亦た已に大に然るなり、回顧すれば過去十年間我外交政策は殆んど對露國政策といふも不可無く、國家問題の一切の起點は常に如何にして露國の南侵に應せんかといふに在りて、朝野唯々汲々として之れが解決に餘念無きのみなりしにも拘らず、扱て彼れが國情に關する調査研究は如何と顧みれば、意外にも冷淡至極の状態にして、西伯利を旅行せし者指を屈するに足らざりし如きは更にも言はず、邦人にして歐洲に遊べる者といへども、足を獨逸以東に入れたるは眞に寥々の感無きを得ず、されば一般社會の如きは露國とし言へば只だ勁敵と心得る位のことにて、其歴史すら一應通覽せし者も至て罕れに多くは日露開戰の竟に免かるべからざるを知りながら、其國情に就ては全く之れを不問に附し去れる也、幸に戰局は終始日本に有利なりしを以て、我れに在りては彼敵國に關する知識薄乏も彼れに於けるが如く甚だしき大失敗を招くに至らざりしと雖ども、併かも嚴格に之れを吟味する時は、又た相應の違算失敗有りて、當初三十萬の兵を以て勝敗を決し得べしと

思ひし者も敵情に迂遠にして、半途俄かに大軍を増援せしむるの已むべからざるを覺りしといふが如き事も有るべく、一日八百人の輸送力を超過せじと信せし西伯利亞鐵道も二千人の兵員を送りて故障なく遂ひには更に多數の軍隊をも輸送し得たるに聊か案外の思を爲したりといふが如きことも有る可く、又た當初は六箇月にして必ず陥落すべしと確信せし旅順の要塞も殊の外時日を要し、爲に豫期以外の生命と財産を費すに至りしといふが如き事も有りしなる可し、而して此等の事は未だ左迄の大事件として事々しく争ふを要せざれど、若し夫れ我當局にして露國の内情に精通し、今より二箇月前早くも這回の露都大騷擾を看破し豫め其趨勢の嚮ふ所を洞察して外交の上之れを利用するの明ありたらむには、我全權も或は騎兵の一隊を以て前後左右を警護せらるゝの要無く國民驢呼の裡に意氣揚々として馬車を帝都の大道に驅ることを得たりしも未だ知るべからず、知識の欠缺豈獨り露國の爲にのみ懼れ且つ戒む可しといはんや。

憶ふに平和は已に恢復せられたりと雖、我戦後經營の基礎は尙依然として對露政策を起點とせざる可からず、滿韓の地に在りては則ち彼我勢力圏を聯ね樞太に在りては則ち彼我國境を接す、對露問題は今猶昨の如く、明日亦た猶今日の如からざるも得ざるなり、然らば邦人今に於て先づ露國の情勢を審かにするに非らずんば、戦後經營といふと雖、畢竟是れ痴人夢を説くの類に了らんのみ、露國の將來果して彼の「ピーヴェリツヂ」が「露西亞之前進」に語る所の如く、捲土重來の餘裕綽々たりとすれば、軍備擴張亦た我れに於て斷じて急務たるを失はずと雖、若し其内情意外に紊亂し、紛糾に次ぐに紛糾を以てし國運の挽回得て期す可からざること、或は彼三宅雄二郎氏が「露西亞の分割」に想見する所の如くんば、我戦後の方針も亦た之れに伴て一考する所勿かる可からず、戦後經營は道ふ迄も無く國家の急務也、されど吾人をして曰はしむれば、露國の研究は更に急務中の急務たるを看る也。

關東報主筆

露國海軍中佐「ピーター」、アレキサンドロウイッチ、アルテミエフ」は、關東報主筆兼發行人たり、一昨年一月彼れ病を發はんが爲め旅順口を發して本國に向ふ、既にして莫斯科に着するや日露開戦の飛報に接しぬ、彼れ以爲らく病重し、然りと雖操觚者の天分を盡くすは正に是時に在り、予は歸りて士氣を鼓舞せざる可からずと、乃ち介卒題を旋らして芝罘に急行し、日本海軍の封鎖を破りて旅順に入る、爾來新聞社は幾度か鐵火を浴び、其屋舎は破壊せられ、其印刷機具は顛覆し、其社員職工は死傷したるも、彼れは此慘憺たる光景の間に、泰然自若として新聞紙の刊行を繼續し、屢々府將「ステツセル」の無能を痛論攻撃して已む無く、遂に其の忌憚に觸れて發行停止の災厄をすら招きぬ、然かも諄々として倦まず遂々として懈らず、以て開城の日に至るまで、其事業を遂行したる也、關東報は實に旅順籠城者に取りて、當時何ものも及ばざる慰藉者たりし也、我國人の露人を知る者、或は「マカロフ」の智を説き、「コンドラチンコ」の勇を語り、「ガボン」の壯舉を稱し、「ゴルキ」の義烈を頌するも、未だ此の風霜の節金鐵の志、古今の文士に類例甚だ罕れなる中佐「アルテミエフ」有るを知る者鮮し、是れ吾人の一言露國に斯人有るを紹介し、長く其名を傳へずして已む能はざる所以也。

立國の意義

今や我が朝野の視線は一に戦後經營の題目に向て集中せらる、日本が戦

争によりて新たに獲たる世界の一等國てふ地位は、今後吾等如何にして之れを維持し且つ之れを上進せしむ可きやは、實に我上下の視聽を聳動しつゝ有る所の大問題也、是れ固より當然にして毫も異とするに足らざるの事、國民たる者宜しく銳意最善の方策を講究して以て、帝國魚眉の急に應ずる責任なかる可からずと雖も、但だ茲に造次顛沛の間だも必ず忘る可からざるは、所謂彼戦後經營なる者の畢竟國家向上の一段に過ぎざる一事是れ也、吾人の國を立つるは戦後經營の爲めにするに非らず、單に國力發展の爲めにするに非らず、是れに由りて何等か民族的大事業を成さむが爲めなる事是也、夫れ人の生まるゝは本來無意義の現象に非らず、國を立て國を興すも亦固より無意義なる可き道理なきなり、吾人は從來に於て屢々東西文明の調和なる語を耳にせり、日本の天職は歐亞文明の統一を圖るに在りとの説を耳にせり、其地理上の形勢に稽ふるも歴史上の觀念に訴ふるも、必ず爾か有らざるべからざる所にして、日本立國の意義は正しく此の如くして初めて理會し得らる可きものたる

を信せんと欲す。

されど東西文明の調和とは如何なることなりや、歐亞文明の統一とは如何なることなりや、之れを言は易く之れ知るは甚だ難きが如し、夫れ既に難しと雖も、日本國民たる者は其世界的新舞臺に入るの瞬間に於て、先づ是非共此の難題を解識し置くの要有る也、少くとも、他日之れを解決すべき準備を講じ置くの要有る也、今夫れ戦後經營といふと雖も、其の爲す所其の施す所、一に唯々吸々として泰西一等國の後塵を拜するものたるに過ぎずんば、是れ日本は東洋を擧げて西洋化せしめんが爲に活現せるに過ぎず、東西文明の調和なるものは則ち所期するに由無き也。憶ふに人文の歴史より達觀するときは、二個の英國を造り、二個の獨逸を興すは必ず無用の業たり、二重の「アングロサクソン」文明を紹介するは必ず無益の手数たり、日本の天職は古來人文の經過に於て是非共無類無匹の特色と異彩とを有するものゝ上に存せざる可からず、吾人が泰西の利器を使用し經濟の發展を圖り國富を増殖するに力むるは可也と雖、

二千餘歳の時と闘ひ、幾多の變遷を経來りたる東洋の文明を犠牲にし、有らゆる手段を歐羅巴亞米利加に取り、一事一物彼れを典型とし模範とせざれば、我新たに獲たる地位を保持する能はずと爲さんには、抑々日露戦争は我大捷を以て局を告げたりといふと雖も、其民族的向上を阻害するの禍や殆んど言辭に絶するもの有らんとす、戦後經營の問題は言ふ迄も無く、大問題也、然れども人は往々手段の爲に目的を忘るゝの弊無しとせず、是れ今に於て我國民の宜ろしく立國の意義に就きて三思する所勿かる可からずとする所以也。

良民の歴史

「アリアン」人種の歴史は其輝ける一面に於て、幾多の大偉人大天才の星の如く燦爛として光彩を放つを觀れども、他の一面に於ては猛獸毒蛇といふと雖尙ほざる戦慄すべき罪惡の紀念を有す、佛國に於ける「セントパルソロミウ」の大虐殺の如き、西班牙に於ける「トルクエマダア」

が九千に近き無辜の生靈を屠りし如き、荷蘭の「ハアレム」に於て其國君が謂れ勿くして一舉二萬の農民を慘殺したる如き、將た伶人の奏樂中突如として鐵槌を以て一々其頭腦を碎きて喜び、小兒の顔是なく微笑むを看て遽然「ナイフ」を其口中に投じて樂みたる露國の「イヴァン、テリブル」の如き、或は又た臣下の鮮血を浴槽に湛へて之れに沐したる瑞典の暴王の如き、苟も人種の所業としては吾人の想到し得ざる無慘酷薄の事跡鮮なからず、若し倫敦に遊ぶ者單に「ウエストミンスター、アベ」の壯觀に酔うて、「ニウゲート」及び「タイバートン」の不快なる追憶に及ばざる有らば、未だ以て與に「アリアン」人の真相を語るに足らざる可き也。

「カーライル」は其の英雄崇拜論に伊太利は亡ぶと雖「ダンテ」は死せずと言へり、然れども乞ふ善美なる者のみ不朽也と念ふ勿れ、顔回の名の朽ちざると共に吾人の記憶は盜跖の名をも離るゝこと無き也、「ソクラテス」を知る者は必ず彼れと抗争せし三十人の暴君有りしことを忘れず、

又た彼れが妻の無慈悲にして放埒なりしことをも同時に聯想せざるを得ざる可きに非ずや。

若し文明の意義にして人類最大多数の幸福を増進するに在りとすれば、吾人は論理上一人の聖人と一人の惡黨とを有する社會よりも必ずや當さに二人の良民を有する社會を以て理想とせざる可からず、猶ほ一人の素封家と一人の素寒貧とより成れる社會よりも寧ろ二人の中産者より成れる社會を以て目的とせざる可からざるが如し、蓋し伊太利亡びて「ダンテ」のみ獨り活くるは、寧ろ初めより「ダンテ」なくして伊太利の亡びざるに若かざるや斷じて論なき也。

果して然らば、我國人の其の古來自國に基督無く釋迦無く孔子無きを以て、國史の耻辱なるかの如く思惟するは餘りに速斷と謂ふ可からずや、何となれば我れに慙かる大徳の人無しと雖、其國民は二千五百餘年に涉りて、未だ一の大罪惡を犯したること無く未だ一人の世界を震慄せしむるに足る可き大惡黨を産したること無ければなり、日本に遊べる外人が

數次一致する所の觀察は、旅館の構造到る處として疎略ならざる勿きに、併かも貨物の盜難に繋るの虞れ極めて罕れなりと云ふに在り、薄弱なる障子紙襖の僅かに隔つる在るに過ぎずして、併かも他の來りて秘密を侵さん企つる者殆んど絶無なりと曰ふに在り、夫れ亞米利の強盜は先づ殺して而して財を奪ふを常則とす、我が單に恐喝文句を竝らべて財を掠めば即ち唯々として去るとは、甚だ趣を異にす、盜人猛けく、いふと雖、彼、我の軒、猶且つ此くの如きもの有り、何ぞ况んや良民をや。

我史乘には固より天皇を毒手に懸けたる無道の臣下無きに非ずと雖、輿論を以て「ホワイトホール」に王の首を刎したるが如き國民の歴史を有せざる也、「アリアン」民族の歴史は必ず奪はずんば已まざるの意を寓すと雖、我れに在りては則ち謙抑自制未だ嘗て國家の大事に處して獻芹の美德を傷くるに迫ばず、是故に國初に大國主命は其有爲英邁の資を以てして、一度國讓の交渉に接するや、屑く自己の領土を明渡して、毫も意に介する所無く、近く徳川十五代將軍は自ら進んで明治丁卯の果決に及

びて、些かも三百年の因襲に屈托するの色を示めざりし也、事當然に屬するが如く然るも、「アリアン」民族をして同一の境遇に在らしめば、固より慘憺たる一場の活劇を経ずして此くの如きの結果を庶幾せんこと斷じて望む可きに非ず、我れに大惡無く大聖無きも、我二千餘年の丹青は之れを要するに良民の歴史也、多數道德の歴史也、「カーライル」の思想を一步超越して國民其者の永久に泯びざるを期するの歴史也。

日露開仗の初めに當りて一外國通信員は覺へず述懐して曰く、日本人は個人としては狡猾の嫌有りと雖、國民としては最も正直なりと、是れ稍我が民族の真相を説明して肯綮を得たるの説に遜じとす可し、蓋し我國民は個々に於て或は大に見る可き無じとするも、相集りて一丸となるに迫んで、造然巨人の性格を發揮するものなれば也、我國民を喩へて櫻花の美に比するは、獨り其散り際の潔きが爲めなりとのみ解す可からず、彼が個々の花には牡丹の艶麗なく薔薇の嬋妍無きも、一朵白雲の如き大觀に接しては、忽ち人をして恍として夢境に入るの感有らしむるもの、

最も取りて日本人の特色を説く可し、我れに必ずしも大聖人なきを恨ま
ず、我れに必ずしも大偉人なきを悲しまざる也。

憶ふに總べての歴史は必ず個人の専有たる可からずして、民族の共有た
らざる可からず、總べての社會は必ず一人の獨占たる可からずして萬人
の所屬たらざる可からず、文明の基點は常に多數の上に在り、多數の道
義に於て秀づる國家は最も文明の理想に肉薄するの國家也、地球は其漸
く圓滿なる時代に遷るに隨て次第に火山の噴出と湖海の陥没とを戒め、
而して風と雨とは刻々其高きを削り低きを埋めて、平盤の世界を現出す
るに多忙を極むるの觀有るに於て、吾人は又人間社會なるもの、進歩が
全く之れと方針を一にすることを認め、時を趁うて政治に經濟に平等の
理想の展開しゆく行路を眺めて我國民の歴史を誇りと爲し、其の既に二
千六百年に涉りて男子と女子と克く皆な義務の觀念に富み獻身の美德に
饒かなるの經過を光榮と爲さずんば有らず、若し世の我國民化育の事に
従ふ者にして、我將來に最も期する所の何たるかを疑ふあらば吾人の答

辯は極めて簡單也、曰く唯だ宜ろしく漸次より善良なる「ゼネレーション」を造ることを目的とすべし、彼大偉人の出現の如き、必ずしも之れ無きを憂ふるに足らず也。

英國選舉界に鑑む

外電の報する所に由れば、英國選舉界の形勢は頗る活潑にして、前首相「バルフホール」氏も遂に大敗を招き、其の選舉區たる「マンチエスタア」東區は、自由黨候補者「ホルリツヂ」氏の爲に全く蹂躪し去られたり、而して目下一般に推測せらるる所に依れば、這回總選舉の結果は結局自由黨の大勝に歸す可しといふ、吾人は此報道に接して思はず感奮に堪へざるもの有らんとする也、勿論「バルフホール」氏の落選に付ては、今日に於て吾人未だ其の事情を知悉し得ずと雖、前首相の重望を以てして、克く選舉區の民心を收攬すること能はず、恚く脆くも自由黨の爲に失敗を招きたる所以のものは、假しや作戰計畫の上に種々の粗漏ありしにせ

よ、之れを要するに、英國々民の政事思想堅實にして雄確、所謂情緣に由りて人物を擧げず、又た妄りに地位名望といふの點を以て盲從せず、寔に其政見の得失に由りて議員の取捨を決するが爲ならずと謂ふ可けんや、「バルフホル」氏の落選は氏の爲に用す可しと雖、一面より觀察すれば是れ英國の政界が其根底に於て健全なる基礎を有するの左券と爲す可きもの、英國の爲には抑々祝す可きの現象と謂ふを妨げざる也。

翻つて之れを本邦の選舉界に見るに選舉民たるものは、通例代議士の郎黨とも稱す可きものに非ざれば即ち代價を受取りて投票を糶賣する者のみ、議員は朝に政友會に入り夕に大同俱樂部に加はるも、其選舉區民は之れと全く相關せず、主義と曰ひ政見と曰ふも、畢竟賣藥の効能書の類にして、之れに信賴するは、偶々以て天下の胡蘆たるに過ぎず、愆くの如くして憲法政治の神聖を維持せんといふ、百年河清を俟つと何ぞ擇ばんや、英國逐鹿界の近事は蓋し我れに於て眞とに鑑む可く學ぶ可き教訓たるを失はざる也。

曾て邦人の倫敦に遊べる者、一日「ハイドパーク」に散策す、時に水色の襟飾を着けたる一個の木強漢有り、身を樹上の梢間に支へて、盛んに快辯を揮ひ、四邊の聽衆亦た熱心に傾聽喝采するを視、有繫は憲法國の本場なりとて只管讚嘆しけるが、後に此大道演説家こそ當時の名士「リチャード、コブデン」なれとの事を耳にし、彼れが政客の民論を指導啓發するに用意の轉た周到熱心なるに感激したりといふ、我選舉民の思想幼稚にして、選舉界の情態言ふに忍びざるもの有るは、素より彼等の缺點たるに相違無きも、憲法發布以來既に十數年の歲月を以てして、却て日に月に政界の退歩し墮落しゆくの跡を認むるが如きは、一は我識者君子の國民を啓發するに不熱心にして、其思潮の如き毫も之に頓着するの要無しと誤解し居るが爲ならずとせず、爾今我政局を刷新し健全にして活潑なる政争を庶幾せんと欲する者少しく英國政事家の態度を學び、單に世の教育家若くは文學者の力によりて國民の性格を陶冶するに甘んぜず、自ら前んで精神を傾け熱血を澆ぎ、以て大に國民政事思想の開發を

謀るを要す、「バルフホール」氏の落選につき、感慨縦横、乃ち其の一二を録して、我國民と併せて我政事家とを規するもの也。(卅九年一月記)

自己の領分

「ツルゲーネフ」の『父と子』を讀みたる者は其の篇中に於て、壯者の老者を凌ぐの意氣躍然たるもの有るを看る可し、是れ抑々露國に今日の革命有る所以也、「イブセン」の『青年團』若くは其有名なる『ノラ』を一讀せし者は、又少壯子弟の長老先輩に對して屈せず譲らざるの概あるを念ふ可し、是れ抑々諾威の獨立有る所以也、然れども蘆花の『不如歸』は然らず、嬋妍たる妙齡の淑女と瀟洒たる青春の才子とは、共に頑冥固陋なる老人の爲に、其の花の如き運命を犠牲に供せらるる也、紅葉の『金色夜叉』は輕薄なる婦人の浮氣に其結構を置くと雖、又仔細に之れを精讀するときは、篇中往々にして新舊の思想相撞突し、併かも其新思想を代表すべき青年の、舊思想を代表する老人に壓倒せらるるの節有

るを發見するに苦まず、宮が母に迫りて貫一の復家を請へるも拒否せらるゝが如き、蓋し其の一例と視る可し、是れ抑々日本に元老の勢威今に至りて尙衰へざる所以、西園寺内閣將さに成らんとして依然重きを閥族の嚮背に置かんと欲する所以に非ずや。

由來東洋の教育は義務本位の教育也、故に忠を説き孝を説き貞を説き和を説く、其説く所固より人倫の大道、吾人敢て非なりといふに非ず、然かも義務本位の道德は則ち他人本位の道德也、服從主義の道德也、或意味に於ては人間の客觀的一面を視るに過ぎざりしものとも曰ふ可く、人格を無視せしものとも稱するを得べし、然りと雖人生れて自己の天地あり宇宙有り、威武も富貴も有らゆる他の何者も、侵す可からず潰す可からざる自己の領分有り禁裏有ることを知らざる可からず、併かも東洋の道德なるものは、頭よりして此領分を排けて懸かる也、天の秘かに人類の爲に繩張りを繞らしたる此の禁裏に向て、容赦なく其の門戸を開放し、剩さへ其堂奥に闖入して、他人てふ本尊を其中に栖込ましむる也、是れ

實に義務教の真相也。

是を以て支那は古來南蠻北狄の徒常に王朝を乗取りて號令を天下に傳ふるも所謂中華の民は恭順歸服して敢て抗せず争はず、蓋し彼の南蠻北狄なるものは即ち聖人の教を奉ずる者に非ざるが故に、攻むる也、取る也、號令する也、所謂中華の民は即ち義務を本位とし服従を主義とするが故に、降る也、與ふる也、遵奉する也、而して王朝一變し、新太祖君臨するも、民に其の政を是非する者なく、惟命惟從ふを以て、其政治は幾も有らずして萎靡し沈衰し頽敗する也、沈衰し頽敗して國乃ち亡び、更に代りて政柄を執る者新たに興る也、故に支那の政治は王朝交迭の瞬間に於て最も健全なり善良なるも、其以後に於ては概して退歩あるのみ、下遷あるのみ、而して是職として義務本位の教育に由來すといふを妨げず、夫れ君主專制政治の下に在りてすら、人民の故無き盲從は其國家を蠱毒すること、實に此くの如きもの有り、况んや民論を基礎とする憲法國に在りて、國民の精神國民の態度亦た此くの如くなるに於て、焉んぞ健全

なる政治上の進歩を期待し得んや、吾人は我國人の病根吾社會の弊源を以て、其の由りて來る所、遠く且つ深きもの有るを認め、戦後教育の本義とする所は、先づ各人をして自己の天地有り自己の自主獨立せる立脚地あるを了會識得せしむるに在ること、を信せずんば非ず、此くの如くして初めて少壯者の意氣有り、健全なる家庭あり、自治行政あり、議院政治あり、責任内閣あり、外交の刷新あり、利權の擴張あり、國家の進歩あり、社會の向上あるを念はずんば非ず、總ての病源は實に茲に在り、總べての弊根は實に茲に在り、先づ請ふ之れを芟除せよ、之れを芟除して而して後ち改革必ず迎へずして成る可き也。

人類の祖先

人類の祖先は猿也、是れ碩儒ダルクウヰンの主張する所に於て、今日の動物學上動ず可からざる定説たり、記せよ、何人も自己の祖先は猿なることを、然らば則ち爾等は門閥家に過度の尊敬を拂ひ、所謂成り上り者に極端なる侮蔑を加ふるの理由無きを了解せん、又た某の夫人の一方に深窓の淑女たりしと、某の妻の他方に裏店の姐たりしと、其間特に争ふ可き程の區別無きを發見せん、兄弟よ、念々疑

六〇
ふ勿れ、人類の祖先の猿たりしは、否認す可からざるの眞理也、而して何人も若し唯だ此争ふ可からざる一片の眞理を玩味し信仰するのみにて、爾等は世に平民主義なるもの有り、社会主義なるもの有る所以の決して偶然ならざるを理解するに餘り有ることならん、將た又た人間社会の道德なるものが、尙低度の地位に在ること、政治文藝社会風俗有らゆる方面に、累々たる大缺點の存在すること、一括約言すれば吾人の境遇が神の世界を去ること、甚だ遠遠なる事由を、心の底より如何にも無理ならぬ次第として、充分に寛恕し得らるゝとならん、而して斯くの如くして、爾等は世に所謂厭世主義なるものゝ頗る短慮の觀念なることを自覺し、滋々以て向上の階梯に向て奮進せざる可からざる必要を肝銘することならん、敢て重ねて注意す、人よ、おんちんの祖先は猿まけ也と。

地久節を以て國民的一大嘉節と成すべし

曩に日本海海戦に於て我聯合艦隊が一舉にして十五萬噸の敵國海軍力を撃滅したりし一事は有史以來の大成功也、露國恐らくは之れが爲めに氣死す可く、列國之れが爲に震駭すべし、吾人國民と雖ども、我海軍が斯くまでに精銳にして斯く迄に光彩陸離たる偉勳を奏せんとは豫想し得ざ

りしなり、帝國々運の爲め豈に驚喜に耐ふ可けんや、道ふ迄も莫く這回
の海戦は日本の國命に取りて容易ならざる關係を有したりしものなれば、
設し此の海戦に於て假令日本海軍の失敗に終らずとするも、敵の蒙る所
の損害意外に輕微にして、彼等の希望通り浦鹽軍港に到達するを得たり
とせんか、同港々口は旅順と甚だ其趣きを異にするもの有るを以て封鎖
の完全に行はれんことを望むは頗る困難なりしなる可く、隨て東洋の聖
海權は尙長時間兩國海軍の孰れにも歸すること勿くして、我日本海の海
上貿易は勿論戦地との聯絡も爲めに多大の影響を免れざりしことならむ。
况んや彼我勝敗の地位を轉するに於て其事直ちに開戦以來の成果を覆へ
し、一舉にして、畫餅に屬せしめたる可きをや、想うて是に到る、吾人
は并舞欣躍、殆ど何の辭を以て之れを祝す可き乎を知らざる也、今之れ
を公報に徴するに、彼我艦隊の衝突は二十七日午後を以て始まり、同日
日暮より翌拂曉に涉りて、得意の水雷襲撃を實行し、而して二十八日中
には「リアンワールド」岩附近の海上に於て敵の司令官「ニエボガトフ」

を降服せしめ敵艦四隻を捕獲せしもの如し、然るに翻て惟みるときは、斯千古の快事たる敵國指揮官の降服せし二十八日は我れに在りて恰も皇后陛下御降誕の吉辰たる地久節に該當す、事固より偶然とは申し乍ら吾人國民たる者如何にも芽出度きが上にも芽出度き心地し侍べる也、且つ側かに承る所に由れば、陛下曩に葉山の御用邸に在ませし折一夜夢に坂本龍馬御前に伺候し、海軍の事斷じて御軫念を勞し給ふに迨ばざる旨を言上せしと云ふ吾人素より此れに由りて濫りに惑信を抱かんとするに非ず、但だし吾人は此の一事に徴し陛下の平素より海防の事に深く意を注がさせ給ふことを拜察して陛下御誕辰の當日に於て、由來女性として扱はるゝ海軍の大捷利ありしを愉快とし、謹んで、皇室の爲め國家の爲め大白を泛べざらんと欲するも得ざる也、願ふに這回の海戦は吾國民の長く忘る可からざる大事件に屬す、而して其事地久節を挾んで數日に涉るが故に幸に斯佳辰を以て以後毎年國民的一大嘉節と爲し一は陛下愛國の御心を拜戴し一は吾が海軍の偉功を百世に紀念せんこと頗ぶる適當の措

置たるを思はずんばあらず、當路の有司之れを以て一私言とし棄つる勿くんば豈營に吾人の本懐のみと言はんや。(廿八年六月一日)

講和會議錄を讀む

過日公表せられたる日露講和議事録は固と兩國全權の談判大要を摘録したるまでにて、是れに由り會場に於ける兩全權が如何なる態度を以て折衝し、如何なる言辭を以て論戦せしかは、全く之れを知ること能はず、されば斯の涉たる一小冊子に收めたる記録を標的とし、兎や角評騰を試むるは無論酷に失するの嫌有るを免れざることなれど、然るにても、何ぞ其の餘りに一本調子にして又た爾かく其の餘りに無趣味に過ぐるの太甚だしきや、吾人は有りの儘に評定す、斯の書中に顯はれたる小村男爵は恰も緣日に於ける榮駝師の如く、其の對手たる「ウキツテ」氏は恰かも買客の如く、「ポーツマス」の談判は恰かも彼等の間に於ける押問答の如しと小村男は其の値切らるゝに任かせて、一步は一步より退讓するの

み、然り彼れは室咲きの盆梅を賣り、飛ばすが如く極めて無造作に其條件を撤回したるもの也。

全議事録を通じて假りに歴巻と名く可きものを求むれば、蓋し其の第六號なるべし、同號は即ち八月十七日の議事を摘録せしものにして此日の議事こそ一切の運命を決したるものなりけれ吾人は勉めて冷やかに且つ心靜かに之れを一讀了したりと雖も、然かも感慨無量殆んど形容す可からざる一種の感に襲はれざるを得ざりき、若し「ボーツマス」の談判席上に「ピスマルク」若くは彼れに近き者有りしと假想すれば、开は慥かに小村男に非ずして「ウキツテ」氏なりしならん、彼れは先づ飽くまでも露國の威嚴を楯に取りて辭色甚だ凛然たり、曰へらく露國は其の威嚴と相容れざる條件に服せむよりは、寧ろ再び干戈を執らんと欲すと、即ち彼れは我全權の言はざる可からざる所を露國の代表者として逸早く宣明したる也、是に於てか日本全權は其戰敗國の爲に却て鐵血を以つて脅かざるの奇觀を示すに至る、乃ち小村男は之れに對して論辯して曰ふ、

露國が戦争を繼續するの力有るは之れを認むと雖、日本も亦た戦争を持續するの覺悟有り、而かも之れを既往一年有半の經驗に徴するに將來の事亦た明かに豫知するを得べし、然れども本會議刻下の問題は事局を極端に推進せしむるに先ち、一個の解決を發見せむとするに在りと、何ぞ其論調の優柔にして其口氣の軟弱なるや、既に事局を推進せしむるに先ち一個の解決を發見せむと欲すと曰ふ、縱令日本は戦争を持續するの覺悟有りと稱すと雖、之れを聽く者何ぞ駭かんや、「ウキツテ」ならざるも「ローゼン」ならざるも、然り恐くは市井尋常の徒と雖、苟も此くの如き言に接して誰か其敵手の胸奥を洞破し得ざらむ、「ウキツテ」は乃ち曰へり、戦争を繼續するは屈辱的平和を買ふに比し一層容易也、且つ夫れ將來に於ける戦争の結果に關し臆斷を爲すことは之れを愼まざる可からずと、此くの如くして我全權は東郷艦隊と大山滿洲軍とを背後に擁して、何の威嚇する所無く、何の壓迫する所無く、唯だく彼れの辭色に辟易して願みて他を言ふの窮地に墜りたり、是時に方りて小村男が敵國全權

の反省を促せる題目は如何と顧みるに、彼れは日本提出の條件が謙讓極まれりといへること及び日露兩國以外の列國が經濟競争に致々汲々たるに係らず徒らに戦争を持續するの兩國に取りて不利なるべしといへること、此二點に過ぎず、即ち敵手の反省を喚起するには餘りに平凡にして且つ餘りに感化力の微弱たるものなり、「ウキツテ」の反省せずして却て増長の態度を示めし來りしは異むに足らざる也、憶ふに慙かる微温的論法よりして後日樺太の一半を割くに至りしが如きは、寧ろ不可思議の現象と謂ふ可きに似たるも、此は我全權の主張に動きしと謂はむよりも、露國內部の騷擾目を趁ふて漸次著しからんとするの傾向有るに屈したるものと見るを當とせん。

吾人は返すも此講和議事録を一讀して東洋の新興國たる日本を代表せし我全權委員の意氣昂らず、縦令事成らざるも是れに由りて世界に傳ふべく後世に胎すべき氣焰すらも見當らず、彼の人道といふことも世界の福祉といふことも、寔に條約成立後の申譯にして其談判の間大に之れを提倡して敵手を義理責めにせし程の跡をも發見せざるを悲むもの也、觀じ來れば、げに二度とは讀むに忍びざる文書也、吾人は覺えず長大息す。

非舉國一致論

昔者羅馬人の「カーセージ」を攻めて、將さに之れを一炬に附せんとするや、時に只だ一人の史家有り、慨然として叫んで曰く、嗚呼何爲れぞ悲惨なる、爾等恚かる沒人道の罪業を敢てして、自ら亦た他日の「カーセージ」たる運命を造らんと欲するか、予は斷じて爾等の爲す所に雷同せざるべしと、然れども戦を好み且つ些かも敵を假借せざる羅馬人は、何人も斯の苦言に耳を假すこと無かりき、斯くて哀れなる「カーセージ」は遂に焼拂はれ、其烟は幾晝夜の久しき、地中海の一隅を照らしてけり、されど斯炯眼なる哲人の言ふ所は正しかりき、彼の聲は固より羅馬の大勢に孤負す、萬衆の要求に背馳す、隨て當時の立場よりして之れを觀れ

ば、其態度や則ち所謂舉國一致と相容れざるものなりき、然かも羅馬は實際此非舉國一致の聲を放てる者の、僅に彼れ一人の史家有るに過ぎざりしが爲に、充分なる反省の機會を與へられざりし也、而して果然遂に又た亡べる也。

何事も一本調子なるは危険の極みと謂ふべし、羅馬人は元來一本調子の民族なりき、「シーザー」出づれば天下の眼中「シーザー」以外一物なきの概有り、「ブルタス」起てば「ブルタス」以外又た「シーザー」すら無きの概有り、既にして「アントニー」の長廣舌に酔ふや、國民の熱涙と熱血とは客氣も無く舉げて斯の曲者の前に傾け澆がるを看たり、彼等は多く考慮せず思案せず、而して單に耳目を以て判断するが故に、謂はば一夜にして輿論生じ一夜にして輿論變ずるの趣有りしが如し、而して其の變するに方りてや又た常に思慮を費やすこと淡きの故を以て、極めて馬車馬的なる代りに又た極めて無造作なるもの有りしが如し、吾人は日本人の營に其の武士的性格に於いて羅馬人と酷肖するもの有るを認め

るのみならず、此の點に於ても亦た互ひに一致し吻合する節有るを感じて、獨り胸を打つて岌々の想無きを得ざらむとす。

舉國一致必ずしも不可ならず、然りと雖も何事にも一本調子なるは、決して嘉みすべきの現象に非ざる也、試みに看よ日清戦争に際しては滿天下支那征伐を口にせざる者無く、坊間の童謡猶は四百餘州を屠り盡くさずんば已まざるの意氣を示しき、而かも一朝馬關條約の成るや、世説遽然として激變し、忽ち支那保全論は野火の荒原を燎くが如く、殆んど一夜にして日本の國論と爲り、又た一人の支那分割を口にする者無くして遂に日露干戈を交ふるに至りぬ、既にして中頃日英同盟の事有るや都鄙到る處賀宴を張り、更に近日其の擴張を見るに及んで、又た鼓腹擊壤海内殆んど異論家の影を留めず、或は又た戦争中朝鮮併呑の説盛んに行はれし如きも近來は論調頓みに一變し、朝鮮は朝鮮人の爲めに保護すべしといふの説何時の間にやら世論を風靡し了せるに似たり、或は又非常特別税は悪税なり斷じて改廢すべしと主張する者有れば、天下翕然として

其説に趁り幾も無くして戦時税の繼續亦た止むべからずとの議を唱ふる者出づれば、追々其派の意見勝利を占め來らんとするものゝ如く、一人減債基金の非を論ずれば、萬口争て其非を鳴らし、既にして一人其の財政整理に缺く可からざる名案たるの意を論ずる者有れば、六百の頭顱目を趁ふて次第に其議に聽從せんとするの姿有るが如し、若し夫れ大學獨立論起れば三日を待たずして輿論は遮二無二大學を獨立せしめずんば已まざるの勢を示すも、久しからずして其の容易に成り難きを認むるや、進んで策を新たに劃せんと欲する者は則ち出づること勿くして、社會は一時に前説を抛擲して顧みず、或は又た二年兵役論を提唱する者有らんか、其月ならずして猫も杓子も二年兵役論者たるべく、或は又た鐵道國有論を標榜する者有らんか、旬日ならずして八公熊公の徒も亦た國有論者たらざるは無からんとす、其趣譬へは猶「ブルタス」に喝采したる羅馬人が數時間ならずして忽ち「アントニ」に心酔せるが如し、輕卒也、無造作也、一本調子也、若し恁かる一本調子の附和雷同を以つて、世人之

を舉國一致と看做すことあらば、是れ實に國民を愚物視する者也、若し斯の如くならざれば國家の政治を行ふに不都合也と解する者有らば、是れ國民思想の自由を拘束して樂まんとする者也、吾人は與みせざる也。人動々もすれば曰く、昔時の民黨なる者は軍備擴張に反對せり、然かも時の政府は斷じて此の俗弊に耳を假すこと勿く、議會の解散を賭して飽く迄民論に抗争したる結果、日本は遂に最近世界の雄邦と戦ひて、光榮有る捷利を博せり、若し當時の民黨なる者にして、其の爲さんと欲する所を擅にせしめたりしならんには、焉んぞ克く今日有らんやと、更に又曰く、近來の政黨が政友會と言はず進歩黨と言はず將た大同俱樂部其他の諸團體と言はず、一切に積極的政策を方針とし、所謂帝國主義を標榜して、外に向て國利國權を伸張せんが爲には、内治の問題を犠牲にするも辭せざるの意氣込を示し來りしは、國家の爲に慶幸此上も無き現象にして、正しく我政黨の進歩的傾向と稱すべきものなりと、然れども吾人は以上の所見に反對せざるを得ず、日本の世界は十數年以前に於て民黨

の強硬なる反抗有りし結果、政府は軍備擴張上思ふ存分の理想的計畫を實施し得ず若くは多少實施の時期を遅からしめしめざるも、實は之れが爲に他日國民の財源よりして巨億の國庫債券を募集し得る資力を得たるもの也、而して又此の資力よりして更らに多大の外債を募集し得るの信用を贏ち得たるもの也、故に民黨も素より幾分の戦功に與かる可き權利有りて、政府者のみ獨り其功に誇る可きものに非ざる也、否當時上下譯も無く相妥協し相融合して、盛んに陸海軍の擴張に熱中せしならんには、列國も意外に嫉妬猜疑の念を醗醸し、其結果我計熱せざるに先ちて、如何なる不測の蹉跌を見るに至りしやも計り知るべからず、縱令然らざるも民力早く涸渴し、不満の聲野に滿ち此の如くして、國民の士氣漸く沮喪し、一朝事有るに方りて、大に國家の用を爲さざりしやも未だ知るべからず、抑も保守は進歩の條件たるが如く、消極論者は常に積極論者の益友を以て待つ可きの理由有り、英國の政治の健全なるは其自由黨と保守黨と一日も未だ會て鎬を削て鬪はざる無きが爲なりとすべく、米國の

政界の腐敗を以てして、猶大體に於て國是を謬らざるものは、又た以て共和黨と民政黨と互に相下らざる賜物と看るを得べし、我戦後の議會にして若し各派漫然積極進取を標榜して、何事に寄らず政府の經營に謳歌すごせば、是或は西園寺内閣の認めて以て舉國一致と爲す所なるべきも、吾人は國運の進歩の爲に、政治の健康の爲に、甚だ取らざる也、何となれば政見の競争茲に廢たるが故也、政見の競争廢たりて而して政治の進歩茲に滯るが故也、夫れ何れの世に在りても反省を與へ警告を加ふる者の必要なるは猶ほ風雪の農作物をして其根幹を固うせしむるに必要なるが如し、吾人の地位は今「カーセージ」を燒拂はんと欲するに非ざるも、彼れ史家の如き爛眼の哲人を無數に有することは、國運の振興に取りて、何よりも最先に急務と爲す所也、吾人は積極消極の是非を問はず唯だ如何にもして一日も早く此無主義無理想の時代を脱し度く希望するのみ是に於てか非舉國一致論を唱ふ。

「ツラファアルガー」の信號

「子ルソン」が「ツラファアルガル」に於て、最初に掲げんとしたる信號旗は、『ネ
ルソンは各員の義務を盡さんことを望む』との意なりき、後に愈々旗章を楯頭に
職すに及んで、『英國は各自の義務を盡さんことを望む』と改めしは、深き意味に
ては有らざりき、唯だ『ネルソン』とするよりも『英國』とせし方、信號上容易
なりしといふ譯も無き理由に歸着す、但だし今より願みるときは、此『英國は』
の一語頗る趣味津津たるもの有り、初めの『子ルソンは』にては力足らず、感深
からず、寔に改めてこそ良かりしなれ。

蠅の目主義

(江戸文明の一特色)

藤は眞つ盛りと言ふ時分で有る、或日長閑なる半日を小石川植物園の池
頭に過ごせしとき、卒然として予の念頭に浮かむだ一事が有る、其れは
他で莫い、今予の眼前に横つて居る斯の庭園は草木の按排と云ひ山水の
配置と云ひ寔に結構なもので、之れを築づいた當時に於ては定めし乗駝
師も大方ならぬ苦心を爲たことで有るふ、將軍家に於ても亦た容易なら
ぬ資本を費やしたることと有るふと思はれるが、扱て足利時代と違つて
徳川時代の庭園には『統一』を缺いて居ると云ふ説が有る、之れを想ひ

出すと如何にも其通りだと云ふ感じが急に起つて來るので有つた。
那處に全景を司配する中心有るか、試みに予は自ら問ふので有る、其山
か其島か、其岩か其松か、けれど如何に稽ふるも、此一點有るが爲めに
總體の釣合が取れ、此一點を除くが爲めに全景が打ち壊はされると云ふ
急所を捉らへることが出來ぬ、寧ろ斯の庭を兩斷したと想像した所で、
將た或は更に數個に分割したと假定した所で、其の割かれたる「セクシ
ョン」は皆な互に獨立の庭園を形成するに足る可しとこそ思はれるので
有る。

勿論此くの如きは必ずしも獨り小石川植物園にのみ注意せらる可き特徴
で無い、砲兵工廠内の舊水戸邸に之くも亦た此感有り、岡山の後樂園廣
島の泉邸扱ては高松の栗林公園の如きに看るも總べて同様の感じが起る
ので有る、是に至つて彼徳川時代の庭園に中心無し統一無しこの觀察は
益々之を首肯することが出來ねばならぬ、否な予をして有體に言はしむ
れば、江戸時代の庭園は其實無數の小庭園を綜合したるに外ならずと評

す可しで有る。

けれどもこの園藝の上に存する特徴、便ち宛かも紫陽花の華の如くに、幾十の獨立せる花が寄り集まつて唯だ一個の大なる花を形造るに過ぎざるが如き奇妙なる主義、或は又た恰かも無數の唾孔が泡の如くに凝り固まれる所の蠅の目に似たる主義、換言すれば那所に中心有るか甚だ鑿別し難き一種の流儀は、果して徳川時代の庭苑を離れて他には一切關係の無かつたことで有るふか。

例へば此植物園を有する東京市、其前身たる江戸の市街は如何なる制度を有した都會で有つたか、勿論江戸は日本建國以來空前の大都會で有つたに相違ない、けれども其大都會なるものは今日の歐米諸國の都市の如く一定の方針の下に規律を有し秩序を有し齊然として一國の大市府たる面目を存して居たで有るふか。

成る程魚河岸にゆけば魚問屋が固まつて居る。馬喰町にゆけば旅籠屋が集まつて居る、又た日蔭町には古着屋が有つて、仲通には骨董屋が有る

といふ風で多少取引の關係に於て市街が分業的に出來て居た處が有つたかも知れぬ、又紐育の二十三層街や倫敦の「ロムバード」街と迄參らざるも、當時の藏前などは幾分か金融の中心を成して居たかも知れ無い、併かしこれは八百八街の全體から通觀すると極僅小なる部分の話で、大體に於ては江戸の市街は散漫雜駁決して歐羅巴や亞米利加邊の都市の如く分業的に出來上つては居ら無かつたものだ。

又た其市内交通の關係や衛生の關係或は又消防の關係など云ふ點から見ても無論之れぞと言ふ程な規律や秩序の有つたものでは無かつたのだ、京に田舎ありの諺も久しいもので有るが、江戸の市街は田舎處ろの騒で無い、比較的熱鬧なる下町も日本橋京橋を除いては商家と侍屋敷と相混交し、此處に繁華な巷が有るかと思へば彼處には辻斬や追刺が行はれると云ふ始末で有つた、即ち少しも都會らしき規律と云ふものが求められ無いと云ふ有様で有つたのだ。

勿論歐米の都府と言つても其發達は最近のことで有る、彼れが今日の市

街を以て三百年前江戸城を築いた人の用意知らざるを責むるは酷かも知れぬ、けれども江戸の街衢の不規律なることは日本國中にも類例の無い話だ、即ち昔の平安城の如きは人の知る通り左京右京坊城等の制度が有つて、道幅二十八丈朱雀通を「バックボーン」として東西各六百八町五十保三十六坊の制が有つたで無いか、又大阪の如きは奈良や京都だけの秩序を有して居ら無かつたけれど、併かし其街衢の整頓して居たことは勿論江戸の比では無かつたので有る。

江戸に就いて吾々の如何にも異様な感に堪へぬは、唯だ徒らに市街が四方八方に廣ろがつた計りで、何處が江戸の中心か識別するに苦んだことでも有つた、今日の東京は往時よりも一層傾向が甚だしく爲りつゝ有るが、昔の江戸に於ても、實は各區互に小江戸を形くつて居つたもので有る、四谷には四谷の中心たる傳馬町有り、牛込には牛込の日本橋たる神樂坂あり、麴町には平河町神田には御成道有り、而して下谷の廣小路、淺草の藏前、芝の神明、深川の入幡前と言ふ風に各一方の繁昌を擅にして居

たので有る、即ち之を概括して觀察すると、小江戸が集まつて大江戸を成して居たので有る、若し琵琶湖の土を浚つて富士山を築づいた様な怪力を藉り來り、當年の牛込や神田や淺草を他へ「モギ」取つて往つたならば、其處には小さき江戸の市街が、何不自由なく獨立して、侍屋敷も有れば寺院も有り、賑やかな市街も有れば九尺二間の裏店も有り、相替らず縁日も立てば、又た蕎麥や天麩羅に不便を缺くことも無かつたで有らふと想像される、果然是に至て江戸其者も亦た紫陽花主義蠅の目主義で出來て居たことが知れるので有る。

更に予は一言徳川氏の封建政治なるものに付て批評するの自由を得度く思ふので有る、徳川氏の天下が三百年の久しきに涉つたのは其力封建制度に依ることは誰れしも疑はぬ所である、封建政治と言へば諸侯を封じて土地を私領せしめたと云ふ極簡單なることに過ぎ無いので有るが、徳川氏の封建制度は支那三代の世に行はれた封建政治や歐羅巴の中世に起つた所謂「フューダリステム」とは聊か趣を異にして居つた。

歐羅巴の封建制度は其起源「アラビヤ」人の歐洲侵襲を防ぐの手段に出で、諸侯に分與したる封土も該初めは之れを私有せしめず、又た縦令之れを私有せしむること有りし場合にも領主は一代制に限られて世襲すること許され無かつた、其れで有るから國王其者と臣下たる諸侯とは恰るで性質が違つて居つたものだと言ふことが言はれる。

成程後世に成つてから此制度も大に變遷して來て諸侯は世襲となり、又た其領地内に於ける諸侯對人民の關係は國王對諸侯の關係と似寄つたものに變化して來たが、其れでも徳川時代の如く甚だしくは無かつたのである。

家康は如何なる考へで江戸幕府の政治組織を定めたか、いづれ深謀遠慮を運ぐらしたことに相違あるまいと信するのだが、其勢望の上から言ても其權力の上から見ても、實は彼れの建てたる封建政治なるものは餘りに諸侯を憚り過ぎた觀が有る、鎌倉幕府は三代にして滅ろんだけれども、頼朝は家康の如く小心で無かつた、寧ろ其の政治の形式は江戸幕府に比

して遙かに堂々として居る、斷然強者の權力を以て六十餘州を統帥し、出來る限り中央集權の基礎を固めんとしたので有る。

彼れの全國に配置した守護地頭は後年足利時代に及んで漸く横暴を極むるに至つたけれども、其初めは幕府直隸の機關で一舉一動鎌倉の指揮を受けずには居られ無かつたもので有る、輒はち江戸時代大名小名の如く幕府に對して陰然一敵國を成して居つたものは性質を異にしたのである。

支那の三代に在ても天子は一人で有つた、歐羅巴の中古に在つても國王は一人で有つた、又た鎌倉時代でも室町時代でも將軍は如何なる意味に於ても一人より無かつた、併かち徳川時代を仔細に觀察すると、其實無數の將軍が居た、無數の大奥が有つた、小さい幕府が全國を通じて一面に散在して居たので有る、家康は實に諸侯と君臣の關係をつくつたので無くして恰かも今日の國家學に於ける聯邦の制度を拵らへた觀が有る、島津や毛利は幕府の臣下で有つたと言ふよりも寧ろ普露西に對する「サ

クソン」「バイエルン」の地位に近かつたと云ふ方が適當で有るかも知れぬ、則ち徳川氏の封建政治なるものは此くの如く中央の權力意外に薄弱なるもので有つたのだ、徳川氏は其實大諸侯で大名は其の實小公方で有つたと言ふも差支無き迄に兩者の間に性質が相違して居ら無かつたのだ。故に規模の大小こそ有れ、政治の有様から家風に至る迄、諸侯は一切範を江戸に採り、幕府に大老あれば地方には家老ありと云ふ風で、お茶坊主迄漏らさず江戸の制度を踏襲したので有つた、輒ち果然是に至て又た彼柴陽花主義蠅の目主義は法制の上にも適用せられて居ることを看出すに苦まぬのでは無いか。

予は歴史家で無いから、説の獨斷に失するご否ごは自ら保障が出来無いので有るが、斯の所謂柴陽花主義蠅の目主義は如何にも江戸文明の一特色として尙ほ汎るく百般の事物に随伴して居つたものゝ如く疑ふので有る。

古來豪傑の政治振りを視るに、彼等は政權を一身に集中して政治上の統

一を謀らんとせしこと勿論で有るが、之れと同時に色々の制度にも干渉して各其向々の統一に腐心したもので有る、或は言語の統一を企てたり、或は法典を編纂して法制の統一を試みて見たり、或は又國教の計劃を目論んで見たり、さまざまの事を遣つて居る、成る程家康の時代には國內に宗教上の紛争も無く又た寺院の勢力を藉りて政治に容喙せんごした陰謀家も無かつたかも知れぬが、家康にして彼れ程の偉器で有りながら、言語法制の統一は兎も角宗教の統一と云ふ問題に對して何事をも目論ま無かつたといふことは餘程不審議と謂ふべしで有る。

「エリサベス」女王は「エビスコーバル」の建設者で英國々教制度の濫觴は渠れに起つて居る、又た「ビートル」大帝は人の知る如く僧侶の手中から教權を奪ひ取つて「ツァール」を教會の首長に仰がしめたる帳本人で有る、其の他「フレデリック」大王でも路易第十四世でも宗教に關して或る種の權力を揮はざること無く、近くは「ビスマルク」すら舊教徒に向て渺なからぬ干渉を試みたもので有る。

徳川氏の時代に於ては前にも言ふ如く野心の有つた僧侶や僧侶を味方として何か一と仕事始めて看よふと爲た謀叛氣の有る政事家も無かつた次第で有るが、併かし一方から言ふと此時代程日本の佛教が種々雑多の宗派に岐れた例めしは之れを既往に求めて得らる可きで無かつた、若し家康にして眞に天下統一の何たるを解し居りたらんには、勢ひ宜ろしく、教界にも干渉して此散漫多岐なる宗門の一統を謀る可きで有たるふ、何となれば人權の蔑視せられたる時世に當つて宗教の統一は民心の歸一を意味するが爲めに、政治家たるものは先づ争て手段を此に求めねばならぬ筈だからだ。

然るに奇なる哉、家康は只天海和尚を最負に爲たと言ふ位のこと、宗教に對して至て冷淡で有つた、無頓着で有つた、イヤ將軍は天下の將軍で有るから、其の信奉する宗教も亦天下萬民の宗教で有らねばならぬ、天台宗可なり一向宗可なり曹洞でも法華でも御座れ、己れは一切干渉は致さぬと云ふ主義で居つた否寧ろ發達をも獎勵せぬと云ふ主義で居つた、

之を評して信教の自由を愛護したと牽強けられぬで無いかも知れぬが、其の實は左様な高尚なる理想の有つた譯で無くして唯だ何事も柴陽花主義に打ち委せたからのことだ、其處で徳川三百年の歴史には獎勵の効果も無く又干渉の反動も無かつた、無論空海も出て來無かつた代りに、「クロムウエル」も現はれ無かつた、鎌倉時代には親鸞や日蓮の如き「エラ」物が居つて一時教界の中心的人物となり滿天下を風靡せんとしたが、左様言ふ壯快なる歴史は江戸には無かつたので有る、而して其の代りに千編一律の寺院制度の下に精神の漸次傾頽し懸けた宗門宗派が唯だ儀式慣例の點に於て聊か相違有る發達を爲た位のこと、ズーつと今日に至るまで、平凡なる経過を繼續して居る。

マダ、此外言ひ度いことは澤山有る、例せば文學の如き美術の如き、何ふも氣の勢かは知らぬが、予の眼には例の柴陽花主義蠅の目主義を以つて擬し度く想はれる點が續々看受けられる、馬琴の小説は支那から脱化した者も多からふが、併かし八犬傳や美少年録や俠客傳などを讀んだ

者は、果して如何なる感じが起るで有るか、全篇を通じて結構の上に、何處に統一を認めるか、誰れが主人公であるか、寧ろ是れ幾多の物語を寄せ集め組み合せて、而して後一篇の小説を構成せること猶紫陽華の如く、所謂蠅の目の如きに類似せざるか、而して此の弊やもとより獨り馬琴の著作にのみ現らはれたる現象で無い、浮世風呂亦た然り、多くの好色本亦た甚だ然かり有る。

更に繪畫に就て言ふも（姑らく支那の畫法を直傳せるものは之を除き）、彼徳川時代の産物たる浮世繪或は大津繪の類に付て察するに、如何にも人をして混雜の感想を惹き起させるものが多い様に思はれる。

誠に書き出すと際限の無い話で有るが、江戸時代には随分といろ／＼な音曲も有つた、常盤津長唄清元一中節河東江戸節などなかく／＼の種類で有つたが、汎ろく全體から看ても狭く一つ／＼に付て考へても、皆んな相似寄つた様な節で、又た殆んど同一の音調が絶へず繰り返されると云ふ有様で有る。

將た芝の御靈屋や日光の靈廟を拜した眼を移して、非倫な話では有るが、試みに之れを華魁の髮飾の上に投じたとき、何處か其間に何と無く一貫した主義が伏在して居ることを看い出しはせぬか。

此種のことを竝らべ立てたら尙ほ記載し度い問題は大に有る、併かも餘りに繁雜に且つ冗長に涉つて、本篇共者が所謂蠅の目主義に吸引せられ、ても成らぬから、先づ／＼此邊で筆を止めることにして置かふ。

但だ終りに一言し置くことが有る、明治の維新と共に封建制度は根本から破壊せられて、政治上の統一爰に初めて其緒に就いたので有るが、併かしながら社會の各方面を振り返つて看ると、江戸時代の惰力で、彼所謂蠅の目主義紫陽花主義がマダ／＼到る處に蔓延つた様だ、同じ様な宣言を發表し同じ様な政綱を掲げた政黨が、委員だとか總務委員だとか言つた様な組織の下に、中心的人物を缺いた儘ヤレコラ／＼とツツ突き合つて居るで無いか、宗教界と言つて見たところで、又た之れと格別の差が無い文學だとか藝術だとか言ふ世界になると、尙更以て天狗の寄り合

で、テンデ勝手な熱を吹き合つて居る、人物既に此くの如し而して其思想に至ては甚だ散漫、又た其の事業に至ても固より小規模の事が多くて、彼方でも此方でもケチな計畫を互に競ひ合つて居ると云ふ有様だ、予敢て江戸文明の價値を頭からケナシ去らふと云ふので無い、唯だ其弊の在る所に察して當世の人が少しく此に省慮を加へんことを祈るので有る、外に向て膨脹せんとする、甚だ可し、然れども之れと同時に汝の足元には尙多くの凝集せざる可からざる總攬せざる可からざる一統せざる可からざる事業の鬱然として横り居ることを忘れては成らぬのだ。

日本文明史論

我中古の爛熳たる文華が、所謂遣唐學問即ち留學生の力に負ふ所大なりしは、歴史上疑ふ可からざる事實也、欽明の朝に至りて偶々百濟王を介して輸入し來りし佛法は一時保守派の健氣なる抵抗に逢着せしも、奇怪なる庇護者の懷に投じて、俄に推古の朝に復活し、一度びは難波の堀江

なる沢中に委棄せられし程の運命も、急轉直下、一瀉千里の勢を以て帝室の寵遇を蒙るに至れり、奇怪なる庇護者とは物部守屋を殺し、穴穗皇子を弑し、而して又た畏れ多くも崇峻天皇を毒手に懸けたる大奸馬子の事を謂ふ也。

有體に言へば日本佛教史の第一頁は汚痕斑々たるもの也、不正不義の酷だしきもの也、日月照さず山川穢せざる底のもの也、到底賄賂の間に生れし教科書位のことには比す可くも有らざりしもの也、併かも此くの如き山緒を有せし佛法は其後駸々として勢力を擴充し來れり、而して其結果として支那文明崇拜熱大に起り、茲に初めて日本留學生なる者盛に隋唐に差遣せらるゝことゝ爲れる也。

史を按ずるに留學生の起源は推古第十五一年七月小野妹子を使節として隋に遣はしたるの際に濫觴す、恰かも岩倉大使に隨て今の元老大官が洋行したると其趣を均ふせるものと謂ふ可し。但だし當時の留學生は僅かに三年四年にして歸朝する今の留學生と異り、孰れも少なからぬ年月を彼

地に過ごせしものにて第一回渡航生の如きは留學中隋の代よりして唐の世に遷りし程なりき、短かきも十五年は日本の土を踏まざりし者なりき、是れ史を讀む者の大に味ふべき點なりとす。

而して更に之に次いで意外に多數の留學生を派遣したりしことも亦宜ろしく稽ふ可きの値ひ有り、現に孝徳帝の時、一年二百五十人の遣唐學問を渡航せしめしこと有り、是れ實に當今の文部省と雖も遙かに企及し得ざるの計劃たり、盛んなりと謂ふ可き也。

更に最後に尙一事の記憶を要する問題あり、他無し、彼等の本國たる日本は當時海上の未開國にして、何から何まで幼稚の状態を免れず、衣服は勿論のこと、家屋の如きも相替らず昔ながらの黒木造にして椽側も無ければ廻廊も無く、柱は土中より突立ちたる儘にて土臺と云ふものすら無く、雨露を凌ぐにも例の萱葺屋根にて勿論瓦と云ふものすら無し、然るに彼等の海を超へて渡れる當時の支那は隋の煬帝の下に、都を修飾し、丹碧燦然たる宮殿を起し、數百萬の工夫を役して千古の大土木たる運河

の掘削を爲すと云ふ形勢なりしこと、是れ也。

曾て支那を遍歴せる「タイムス」通信員の説に、支那といふ國は恐ろしき魔力を有する國也、歐羅巴邊の操觚者にして此地に渡來し物の三四年も滞在せる者は、其文章自然に支那的感化を受け、往々本國人には理解し得られぬ尊大の筆法誇張の字句を弄するに至る、と、亞細亞を馬鹿にせる彼等が僅かに三四年の日子を以てして既に此くの如きの感化を蒙る可しとせば、推古孝徳時代の留學生が如何なる感動を受けたりしや、之れを想像するは甚だ難からず。

彼等は先づ十數年の月日を支那に送れり、是れ半ば支那の歸化人たらしめしと云ふも不可無き也、而して其半歸化人の耳目に觸るゝ所は、田舎漢の江戸見物よりも遙かに破格非倫の事物にして、其規模と云ひ其結構と云ひ、日本にては曾て想像だも及ばざりし事共也、彼等が歸朝後日本分子打破主義の鼓吹者と爲り、只管隋唐の文物に隨喜渴仰の涙を澆げる拜外宗徒と爲りしは、理の當然と謂ふ可し、而して此徒素り僅々十數人

に過ぎざりせば、何の勢力も無かりし話なれど、如何にも一年二百五十人云ふ素破らしき多勢の半歸化人を出だしたることよて、政治に社會に朝廷に民間に恐ろしき迄其勢力を揮ひ、物質上は勿論精神上の問題に至るまで、事毎に思ひ切つたる大改革を施したる也。

此くの如くして大化の革新も生れ、此くの如くして所謂奈良朝の文明なる者も生れたり、律令も編纂せられ冠十九階八省百官の制も置かれたり、今迄日本人の手にせしことも無かりし銀錢なごいふピカ／＼物も出来、國博士音博士など呼ぶ學者も顯れ、娛樂も舶來し、朱塗の宮殿も建ち、無論宏壯なる寺院も、金銅盧舍那佛も續々として造られ、片假名も發明せられ、平假名も案出せられ、歴史の編修の如きも始まりたり、實に迅雷耳を掩ふに遑有らざる變遷なり、進歩なりし也。

然れども一面より觀れば、佛教の波來と之れに伴ふ外國文明の傳播とは或は吾日本の歴史に取りて一大恨事たりしやも未だ知る可からず、痛惜深慨すべき大々的恨事たりしやも未だ知る可からざる也。

何を以て是れを謂ふ乎、試みに思へ、吾人の國する日本は四面環海の一孤島に非ずや、右を向きても左を顧みても八重の潮路に取り巻かれたる絶海の別天地に非ずや、若し世界の文明史上に於て、所謂印度系を離れ、所謂埃及系を離れ、「アラビヤ」系を離れ、「アリヤン」系を離れ、又支那系をも離れて、斯くて一切の大陸系以外に、獨特嶄新の文明系統を開くもの有りせば、其一是亞米利加にして、其二是小なりと雖も日本なりしならん。

然るに亞米利加は意地悪るき關龍の爲めに其秘密の幕を奪ひ去られぬ、將來何等かの特別な文明を齎らす可かりし土人の社會は忽ちにして白人の蹂躪を蒙り、歐羅巴の文明開化を其儘移植せられて散々に壓倒せられぬ、是れ實に惜みても餘り有る事也、眞に千古の一大恨事たる也。而して我日本に至りては、是れより先既に寧樂朝の前後即ち西曆第七世紀の末葉よりして第八世紀の初葉に涉りて、早くも思想と物質と共に大陸の感化を享け日本民族在來の文明は茲に一大變動を蒙るべく餘儀無く

せられたる也、殆んど全く急進的外國文明の勢力の爲めに一時固有の開化を犠牲に供じ了れる也。

夫れ日本民族は人種として甚だ聰明敏達なるもの也、孤立するも必ず何等かの飛躍を爲し何等かの偉業を成す可かりしもの也、必ずしも外國の手引を待ち案内を受くるに非ざれば世に乗り出すこと能はざりし人種に非ず、其證據は日本人の戦争好なるに由りて之れを知り得可し、戦争を好むは競争を好むなり、競争を好むは進歩を愛する也、故に日本人は先天的に進歩的民族たる也。

日本の歴史は古くして且つ長き也、建國以來徳川氏の末世西力東漸の時代に至る迄少くとも二千五百年有り、既に此長時間有り、進歩的民族たる日本人にして袖手何事を爲すこと無く、空しく二千五百年の歲月を徒消するが如きは實際有り得可からざる事也、然り奈良朝の文物は眩耀たりしならん、絢爛たりしならん、然も之れが爲めに端無く武門政治を誘發し、久しく日本全土を舉げて慘憺たる境遇に沈淪せしめぬ、輒ち

大局より達觀するときは差引勘定が合はぬ也、然り支那文明の傳來なきも、徐ろに且つ堅固に在來の日本文明を發達せし方或は寧ろ賢なりしやも斗り難し、彼徳川氏は鎖國政策を執りて一步も動かざりしと雖も、其昇平三百年の歴史が甚だ貴重なる文明上の産物に饒かなりし點より見る時は、二千五百年を経過せる間には如何なる一大異彩の日本民族の手によりて發揮せられたりしやも斗り難かりし也、是れ餘りに奇を衒ふの說に似たりと雖、實際有り得可き想像也、然りと雖、今日に於て絶對的に斯かる理想を説くは無益の事也、又た人類は其天稟の賦性として社交的動物たる限り、他種族との交通に由り、或程度迄其文明に感化せらるゝは寔に已むを得ざると謂ふ可し、否な甚だ必要なることたるを疑はざる也、但し如何なる場合に在りても自主的觀念は他國の文明を輸入するに方りて瞬時も忘却す可からざる條件たり、是れ予が當さに固く執つて動かざる所の論點たる也、而して此點に於て予は當時奈良朝前後に輸入せられたる文明が尙飽く迄見識無き事蹟たりしことを主張す可き理由

有るを認め、甚だ迷惑千萬の事蹟たりしことを宣告す可き理由あるを認むる也。

九六

道ふこと莫れ、日本の文明は推古以前欽明以前といへども既に純粹の發達を爲しつゝ有りしに非ずと、然り三韓文明の餘瀝は夙く已に流れて斯國人の頤を沾ほせしなる可し、然れども吾人は記憶せざる可からず、大に記憶せざる可からず、蓋し推古以前の文明は日本人が崇拜して獲たる文明に非らざる也、叩頭跪拜して得たる文明に非ざる也、然れども征服して獲たるの文明也、勝者の地位に立ち唯だ參考として採用したりと云ふ迄の文明也、故に其文明傳來の状況や飽迄も自主的也、主我的也、徹頭徹尾我れに人格有る也、動もすれば國體を蔑視し美俗良慣を寸斷にし國民の道徳と思想とを投げ出して迎へたるの文明に非ざる也。

應神の朝、百濟より阿直岐來り、次いて王仁來り、斯くの如くして論語入り、儒教入る、然れども日本人の道徳は斯儒教によりて初めて啓導せられ開發せられたりと謬る勿れ、菟道の稚郎子が皇位を讓られしは、儒

教の感化なりと謂ふ、或は然る可し、然れども是より以前と雖も日本人は克く謙讓の美德を解し居たり、大國主命が瓊々杵尊に國家を擧げて捧げ奉りしは、何等の大雅量ぞや、夫れ忠孝は儒教の骨子とする所、彼れに在りて人倫の大本と爲す所たりと雖、併かも是れを以て彼れの發明なりと思ふは謬りの甚だしきものなり、我祖先教は儒教に先つ幾百年の昔より能く斯道を明にし、歷世の天皇必ず神器を祀り、崇神天皇の如きは、之れを皇居に奉置し日夕起臥を共にするを以て不敬なりとさへ思惟し玉へるに非らずや、將た彼殉死の制の如き、其事聊か蠻習に屬せざるに非ずと雖、以て君臣の關係の想像外に密接にして、君死なば、臣亦死なん底の壯烈なる意義を見る可しとせずや、若し夫れ夫唱婦和の大節の如きに至ても、儒教の舶來に先ち吾等は橘姫の波間に躍進して以て日本武尊の難船を救ひ玉ひし美しくも又床かしき歴史上の事實を有し須勢理媛の大已貴命を慕へる歌に、『汝をおきて男はなし、汝をおきて夫はなし』と言へる優さしき愛情の中にも貞操の凜として風霜の概あるが如きを看

出すに苦まざる可き也。
儒教は日本人に倫理を興へたるに非ず、日本人本來の道義心が偶儒教に一致せしのみ、彼れよりして我れ生れたるに非ず、彼れを取つて我れの参考に供したるに過ぎざるのみ。

然りと雖、推古以後佛教の勢力は全く之れに反す、馬子は崇峻天皇を弑し奉れるも、厩皇子は之れを前世の因果也と觀じ玉ひ、憲法十七條を立て、道德の大本を定め玉へる程の聰明にて在はしながら、此大奸に何等の制裁をも加ふることを能くし玉はざりし也、是れ實に我祖先教の歴史の上に一大變化の生じ來ることを意味せしものと云ふ可し、果然是れよりして帝室は漸く劇烈なる佛教信者と化し、聖武帝の如きは敢て自ら三寶奴と宣はせ玉ひて毫も憚るの色なく、終には次第に政治を以て俗界の仕事なるが如く感想するの風を生じ、平安朝に入りては歴代の天皇孰れも十歳に満たざる人多く、近衛帝の如きは實に三歳にて位に即き玉ひ、又た一方には天子落飾の弊慣を生じ、法皇と謂ふが如き一種の制度を胚

胎し來り、花山帝の如きは皇后の薨去を痛むの情に堪へずして遂に遁世し玉ふに至れり、政治の中心既に此くの如し、臣下の亂脈推して知る可きのみ。是に於てか蝦夷有り入鹿有り惠美押勝有り弓削道鏡有り、既にして藤原道長有り既にして將門有り、純友有り、園城寺の僧徒あり、延曆寺の山法師有り、興福寺の鉢卷坊主あり、或は皇位を覬覦し或は専横暴恣の振舞を爲す、切齒扼腕の至りと調ふ可し、然かも其基く所皆な過度の外國文明崇拜よりして王室の式微を促せしに外ならざる也、而して一方を顧みれば、彼れより何者も來朝せざるに我れ進んで卑屈にも自ら公使を隋に派遣し、非常の危険を踏み、幾多の人材を殺し幾多の財貨を沈め、而して一度遣唐學生の歸國するや授くるに僧官を以てし、國博士を以てし、精神上の事より物質上の事に至る迄舉げて其齎らし來れる所宇治川の橋すらロク／＼架設も出來ざりし時世に左京右京といふが如き長安式の都を築き、人民は米を荷ひ、燈袋をブラ下げ飢死の覺悟を以て

旅行すると云ふ世の中に、坊主と官吏とは絢爛たる装束を着、アソキス絶とやらいふ絹は無粹なり野暮なり宜しく錦にすべし綾にすべしなど無暗に贅を主張し、國民は堅鹽を嚙ちり糟湯酒と呼ぶ後世のドロクも迨ばざる飲料に舌を鼓ちたる時代に、孝徳の御宇には早くも百濟より牛乳を輸入したれば、大官縉紳の輩は牛酪を製して喰ひ、今の西洋料理宜敷と謂つた風の御馳走をも快喫したるなる可く、又た今日東京の上流社會が態々伊丹より酒を樽にて取寄する如く、當時の本場たる吉備より所謂『吉備酒』を徴して曲水の宴をも張りたるなる可し。

而して持統天皇の朝には觀成なる者お白粉を案出したる由なれば、當世の式部連が廂髮に一世の物議を醸せる如く、無論其頃の貴婦人は争て粉飾し、盛んに男子の意を動かさんと努めたるなるべく、又た當時男女交際の自由なりしことは今日の比に派すして、聖武天皇の如きは風俗壞亂の一大源泉たりし彼歌垣と稱する遊戯をすら天覽あらせられし程の次第なりければ、平安朝に入りては淫靡の風特に酷だしく、到底今日の男女

學生が魔風戀風を虎の巻とし、新聞の葉書集を介して情を通するが如き迂遠の遣り方に非ざりき。蓋し我寧樂朝より平安朝に涉るの時代は支那に在りても、最も華奢淫蕩の風盛んに行はれ、現に我聖武孝謙の時代は恰も彼れに在りて唐の玄宗の世に當り、千古の美人揚貴妃が其傾國の色を以て徐ろに天下の大亂を挑發し來れる時なりき。彼遣唐留學生の一行は定めて彼地に航して三藏の天竺より歸りし土産話も聽きたるなる可けれど、又た之と同時に彼れが朝廷の華美榮華にもあこがれ、歸來頻りに日本分子打破主義を振翳して一事一物玉石混淆的の輸入を試みたりしことなる可し、日本人は由來淡薄なり無邪氣なり、所謂ザツコバラ也、雄略帝の剛復を以てして一度其皇后の忠言に逢へば、飄然として直ちに其説に聽き其旨に隨ひ玉へる也、日本人は由來君民同祖と云ふ觀念に秀でたるより其施政の方針も平民主義也、聖賢の所謂王道なる者は期せずして日本に發達せる也、仁徳天皇が高津の宮に登臨し玉ひて民の寇の賑ひを悦ばせ玉ひしは如何にも麗はしく有難き大御心也、然かも多くの支那

留學生は斯かる點に回顧せざりき、國粹の保存に全然無感覺なりき、彼等は支那の制度、即ち換言すれば國家成立の歴史を異にしたる異國の制度を以て日本を開發す可く目論見たる也。是れ甚だしき大淺見なりき。彼等は日本も亦支那の如く、山河千里國、城闕九重門、不見皇居壯、安知天子尊、と思へり、是に於てか、先づ都門を修飾し、宮城を壯麗にすることを急務と信じたり、故に皇居の屋根をも瓦葺にし、其柱をも朱塗にし、繁文褥禮の制度を立て、朝廷の役人は嚴めしき冠を着け變挺古なる笏を持ち、奇妙な椅子に坐りて、グツと濟さねばならぬものと心得たり、斯くの如くして皇室と人民との間を隔離し、王者の德澤の下民に迨ばざるべきを氣附かざりき。七堂伽藍を建て金碧燦爛たる土木を起すが爲めに、人民は如何に其租庸調に苦むかを問はざりき、而して其結果淡薄なる氣性の人民も漸く陰險となりて、或は僧侶と變じて脱税を計り、次第に偽善の風一世を風靡し來れるを顧慮せざりき、國內には屢々大風ありき、大水ありき、大地震ありき、大飢饉ありき、大疱疹ありき、富

士山は焼けたりき、肥後の地には大浸水ありき、併かも斯かる事には眼も呉れざりし也。

彼等の中、賢き者は神佛一體の説を唱へたりき、行基先づ之れを唱へ最澄空海之れに和したりき、然れども彼等は神道を基として佛教を之れに調和せしめんとしたるに非ず、佛教を主として吾固有の祖先教を之れに牽強附會せしめたるに過ぎざる也、固より主我的に非ざりし也、彼等の内、愚かなるものは、日本の歴史を擧げて支那の歴史と辻褃を合はさしめんとまで企てき、或は道鏡に皇位を禪るを以て天下泰平なる可しと謂ひし者の如きは安祿山の如き人物も日本に無くて成らぬと感じたる譯なりしやも知る可からず。

殊に最も馬鹿らしきは、佛事を以て國家の最も重大なる事務と解せし結果、上下を擧げて佛いぢりに目を暮らし、或は妻を棄て家を棄て國を棄てて願みざらんとする所謂厭世の惡風を傳播せしこと是れ也、元來日本人は快活なる民族なりき、すが／＼しき性格を有する人種なりき、彼等

は天の岩戸に迫り太神樂を上げて、踊つたり跳ねたりする人種なりき、頗る愉快的なりし也、頗る樂天的なりし也、然るに佛教傳來のお蔭によりて念佛三昧の人民と爲れり。其爲めには網をも焼かれて漁りすることを禁せられ其爲めには鷹を飼ふことも廢せられ狗を養ふことも制せられ、狩りすることすら自由を缺くに至れり、一世を擧げて幽閉と爲れり、萎靡不振と爲れり、如何にも亡國の兆はのめきたる也。

終に駿遠地方に收容したる新羅人も謀叛を企つる様になり、南蠻と稱する外夷も九州の南を犯さんと試むるに至れり、幸に其勢力は微々たるものなりしを以て國難といふ迄には至らざりしこそ僥倖なれ。

然れども吾人は當時の歴史を緝く毎に想へらく、日本の地位たる、絶海の孤島にして、海上の交通至つて不便なりしは、是れ無上の天佑なりきと、何となれば、若し之に反して海上の往來自由に、夙に日本と支那との聯絡敏活に行はれ居たりとせんか、無論馬子の如き道鏡の如き奸物は背後に隋唐の勢力を恃むで、自ら皇位を篡奪するか否らざれば日本を擧

げて支那の屬邦たらしめんと企てたる可ければ也、幸に萬々一にも斯かる大罪惡を行はざりしとするも、滔々たる外國文明の崇拜熱は、朝野をして一事一物支那の輸入品を仰がずんば已まざること、猶徳川氏の末葉長崎に遊ぶ者の一片の羅紗切れ一函の「マツチ」に吝し氣も無く小判を拂つて得々たりしが如くなるべくして其結果は遂に經濟上日本國力の破産を招くに至る可ければ也。

天下若し伊勢の神風と日本沿海の波濤とを以て單に元寇に禍せしものと思はざり、開は一を知て二を知らざるの迂見なる可し、我日本を圍繞する外界の天然力は已に鎌倉以前、日本の朝野が外國の文物に心酔せしとき、實は陰然たる一大牽制力となりて、賣國奴や當時無謀の支那「ハイカラ」をして、國礎を危ふす可き一切の行爲を暗々裏に防礙しつゝ有りし也、是れ實に一大消極的天佑と言ふ可き也、吾人は衷心より長へに感謝の意を斯の宏大なる自然の前に捧ぐるの自覺勿かる可からず。

更に之と同時に尙一の注意すべき天然力あり、即ち内地の地勢山嶽に富

み、隨て又た内地交通の便甚だ不自由なりしこと是れ也、此地勢は一方に蝦夷熊襲の如き蠻族をして容易に畿内を窺ふこと勿からしめぬ、桓武天皇の山城に平安城を築き玉ひしは、一説に依れば其大目的たる、東夷を征討するに好都合なりしが爲めなりと云ふ、吾人は歴史家を以て任ずる者に非ざれば其説の當否は之れを知らざれども、吾人を以て見れば、外を征するよりも内を窺はれざりし方寧ろ地勢に負ふ所の大なるを知る可きが如し、支那の王朝が屢次北狄南蠻に乘取られたるは、一は其文華の中心たる地の坦々たる千里の平野に圍まれ、容易に侵襲を被ふるに都合好かりしが爲めなりしと思はる、日本にて寧樂朝平安朝時代の文明が人を以て文弱に陥らしめ而して幸に蠻族の乘する所と爲らざりしは、畢竟峻嶮なる山嶽噴白激蕩せる河川の網の如く全國に瀰布せること其主因たるを察すべき也、是れ實に一大天佑と云ふべし。

然り而して尙又た之れと同時に、地勢の此くの如くなりしが爲めに、外國傳來の急進的文明が、中央の大都會にこそ勢を逞ふじたれ、地方には

其割合に波及せざりしことも、日本文明史上大に留意を要す可き點なりと謂はざる可からず、方今東京に於ける男女風俗の流行は一週間ならずして、忽ち京都大阪にも傳播し、仙臺にも福岡にも滔々として踏襲せらるることなれど、然かも一千餘年前の日本に在りては決して左様早くは襲用せられず、縦令青丹よし寧樂の都は非常なる「ハイカラ」式にても、縦令平安は大の「モロコシ」風にても田舎は依然として太古の社會也、神代式の世の中也、案外にも貴族的文明とは同化せざりし也。

無論佛教の勢力は衝る可からざる形況なりき。聖武帝は國分寺を置きたりき。天武天皇は毎戸持佛を設くるの制を立てたりき。僧侶は山を開き道を通じたりき、或は片假名平假名の發明も有りたりき、然れ共地方人民は未だ容易に外國文明の有難味を感せざりし也。彼等は朝廷の優遇せる歸化人も穢多として賤みたり、或時は外國の使節をも屠らんとしたりき。中央政府が文事に憧れ風流に荒みつゝある間に、其或者は筋骨を鍛へ武術を鍊りたりき、佛壇に額く前に神棚に敬することを忘れざりき、

約言すれば彼等は外國文明の爲めに俄かに其志を奪はれざりし也、其風俗習慣を破壊せられざりし也、彼等の間には何處にか日本人の健全なる思想残りし也、主我的觀念保たれし也、純粹の日本文明傳はりし也。

是を以て支那文明は寧樂と平安とをして心酔せしめ、謳歌せしめられたるも、地方には其急進的勢力は次第に緩和せられて漸進的の者と變じたり、參考的のものと爲れり、斯くの如くして初めて北條時宗の如き快男兒も出で日蓮の如き兎も角世界統一の理想を有する傑物も生れ、豊太閤も顯はれ家康も起りたり、是れ皆な要するに地方の産也、奈良平安の當時に在りては赤毛布の田舎漢を以て目せられし者の子孫也。

殊に徳川氏は日本文明の爲めには大恩人と謂ふべし、彼れは（無意識的なるにもせよ）自己の支配する天下をして成る可く外國の勢力を藉らずして發達せしめんことを計りき、彼れは和蘭の開化を知らざるに非ず英吉利の文明を解せざるに非ず、然れども之れに頼りて日本を啓導することの頗る無謀なるを觀破したれば、極力西力の東漸を豫防せんと努めた

りき、前後三十萬の天主教徒を殺戮せしは、如何にも、野蠻なるに相違なかりしと雖、當時に在りては此政策は國家の運命に取りて必ずしも英斷ならずとせず、良策ならずとせざる也、排外思想は一面より見れば固陋なり頑冥不靈也、然れども他の一面に於ては民族の獨立心を意味すること勿論たり、自主的觀念を意味すること勿論たる也、若し徳川氏にして奈良朝時代の政事家の如く、歐羅巴の文明を歓迎せしならんには、我國の運命は夙に厦門の如く、爪哇呂宋の如かりしも未だ知る可からず、縱令然らざるも彼等外人の巧妙なる貿易術によりて夙に我財力を吸ひ取られしやも未だ知る可からず、現に幕末「シーボルト」は長崎に在りて和蘭人の年々持ち去る黄金の無量なるを嘆じ、逢ふ人毎に日本人の警戒を促がし、我國人一度び歐洲に渡り、彼地の産業を研究して爾る後宜ろしく開港の計に出づ可しとさへ注意したる程なりき。幕末の時代に於てすら識者尙此感あり、然るを若し徳川初年の比よりして早く既に外國文明を輸入し、江戸城を築くに赤煉瓦を以てし、或は全國に令して天主教

會堂を設けしむるが如き態度に出でたらんには家國民人の禍恐くは之れより大なるは莫かりしならん、徳川氏の鎖國政治は大體に於て甚だ當を得たるものなり、頗る機宜に適へるもの也、吾輩は敢て之れを批難せざる可き也。

されば徳川氏三百年の天下は日本民族が漸く固有の才能を發揮し古來の潜勢力を放散す可く準備せられたるものと見て不可無し、果して國學者も出でたり、本居宣長も現はれ、加茂真淵も起りたり、尊王論も唱へられたり、山崎闇齋も顯はれ、水戸黃門も出で頼山陽も生れ、嗚呼忠臣楠子之墓も立ち、護王大明神も祀られたり、兵學を興じ大砲を鑄り初めて永久的國防と云ふ觀念も胚胎せり、日章旗を船舶に翻すと云ふ思想も濫觴せり、而して一方を顧みれば法令を發布するにも平易なる假名交りの文章を以てし、又た之れを認むるにも御家流と云ふが如き擡けた書風を以てしたりき、日本人によりて創造せられたる樂器も用ひられ、日本人によりて案出せられたる音曲も行はれたり、支那畫の系統を離れたる浮

世繪の如きも書かれたり、光琳の如き圖案家も出でたり、外國に何の先例も無き武家制度も立ちたり、總じて政治上の機關も組織も全く新案の下に定まりたり、萬事が何と無く自覺的となれり、主我的となれり、日本的となりたる也。

嚴格に言へば徳川氏素より絶對的に鎖國せしに非ず、我れよりも御朱印船を出だし彼れよりも來りて貿易することを許るしたり、吉宗の如きは洋學を興したり、科學上の機械をも輸入したり、或は又た當時の儒者社會に在りては支那聖賢の教を理想とし、四書五經を以て經典と爲すの姿なりき、斯くて先聖殿といふが如き聖堂と云ふが如き、日本に於て興されたる孔子の禮拜堂も有りき、固より山陽の見識を以てして國史を編むに漢文を排することを能くせざりき、水戸義公の人格を以てして尙舜水の遺文を輯録するに方りて卷端自ら待つに門人の二字を以てしたりき、闇齋が孔孟若し騎數萬を率い來りて我邦に寇せば吾黨之れを如何す可き乎と問へるに對し其門下生は之れが即答に躊躇したる有様なりき、然り

と雖當時の儒者は寧樂朝平安朝の學者輩の如く氣骨無き白徒に非ざりし也、縦令貝原益軒は一世の儒者を罵倒し其相率いて自家の説を立つるに急にして他人の揚足を取るの陋風有るを嘆じ、徂徠を浮燥の徒と呼び仁齋を近世の俗儒と喝破したりと雖、吾人を以て之れを看れば、其自家の説を立つるに急なりとは、是れ我朝の學徒が漸く漢學を咀嚼し消化し來れるの結果とし看る可きものにして彼の奈良朝以後の遣唐學問一輩の如く外國文明を鵜呑み丸呑みにしたりし者と自ら其選を異にし點なりと謂はずんば有らず。

之れを要するに徳川氏の外國文明に對する態度は決して崇拜的に非ず、寧ろ慥かに參考的なりき、斷じて急進的に非ず、寧ろ保守的なりき。是れ實に日本の國運に取りては貴重すべき事態なりと謂ふべし、而して明治維新後國民の進歩が極めて堅固なる立脚地に於て行はれつゝ有る所以のもの亦た此に由來するを疑ふ可からざる也。

素より寧樂朝の文明も平安朝の開化も今日に於ては當時の田舎漢たる地

方人士の子孫によりて、漸次同化せられたることなれば、其弊の全國に波及せし所は至て少く、却て日本人固有の才能を刺撃し、多くの有利なる産物を製作することゝ爲れり、是れ大に賀す可き事也、然れども此成果に對し、之れを偏へに當時の隋唐留學生を首めとし、其他の支那文明輸入に干與せし者の功勞なりと思ふは、餘り淺膚の意見と謂はざる可からず、而して其理由は既に縷々前陳せし如く、彼等は歴史を顧みず、國家成立の大本を辨せず、國情を察せず、國民の思想道徳を慮らず、只管日本分子打破を以て其標榜とし、支那風漢土式を以て其主義としたれば也、蓋し彼等の注入したる隋唐の文物は幸に當時山嶽に遮られ湖川に隔てられたる一般國民の直ちに採用する所と爲らざりし爲、爾後幾百年を経過する間に初めて咀嚼せられ消化せられしに過ぎず、其國命を殆ふくする事なくして今日の盛運を見るに至りしは主として天然の力と地方に於ける太古式の社會とありし爲めのみ。

維新の際今上陛下を輔けて王政復古の偉業を立てたる岩倉公は、當時如

何なる方針を以て日本の政治を執らんかと惑ひぬ公及其周囲の功臣は初め思へらく、宜ろしく、天智中興の規模に則る可しと、然るに其頃洛北に一偉人有りき。公辭を卑ふし禮を厚ふし、迎へて帷幄に參せしめ、因りて其意見を徵す、某是に於て言下に喝破して曰く、唯だ宜ろしく神武建國の宏謨に則る可きのみと、公大に感ずる所有り、明治維新の基礎初めて成りしと云ふ、斯偉人姓を玉松名を操と呼ぶ、後ち岩倉公の歐米巡遊を了へ歸來漸く歐化主義に傾くを看、慨然公と絶ち、終に嵯峨に隱遁して復たび世に出でざりしとなり、而して方今其名未だ多く世人の知る所とならずと雖、識見古今を曠ふし、抱負宇内を呑めりと謂ふ可し、國家の柱石國民の大恩人に非ずして何ぞや。

遮莫、政治の大本は恁かる哲人の經綸に待ちて、大に當時の大官を戒飭し其膽玉を張らしめ、其眼孔を開かじめたりと雖も、彼れの幾もなくして慨然袂を拂て去りたる如く、遣外の使節を始めとし、歐米に遊びたる者は、恰かも寧樂朝時代の遣唐學問を氣取りて、往々外國の文明とし言

へば玉石共に採り、蕪蕪併せ迎ふるの陋を敢てしたりき、或者は當年の空海や眞備を以て任じ、羅馬字の會と云ふが如き、あたじけなき團體をも興じたり、日本文を横書にする事をも獎勵せり、或は又た春日神社を丹聖にて塗飾し、大極殿の屋上に碧瓦を置きしが如く、東京に煉瓦地と云ふものを築き、之れを以て摸範市街と爲さんと企てし者も有り、所謂鹿鳴館時代といふものも生れ例の假裝舞踏といふが如き頗る噴飯すべき狂言も始まりたり、斯くして外には卑屈なる外交行はれ、内には佛蘭西流の自由民權論も唱道せられたり、外國人は益々羽振を利かせり、流行の源となれり、崇拜の中心となれり、其結果日本文典を第二位とし英語の文法を主とせし教育も行はれたり、西洋の讀本を反譯したる教科書も用いられたり、斯かる事は實に枚擧に遑あらざる迄に盛んに蔓これり。然れども斯傾向の餘りに酷だしかりし爲め、次第に反動起りぬ、國粹保存主義の新聞雜誌も出で、保守主義の政黨も生れ、政府當局者中にも大に國家主義の意見を有し之れを實行するものも顯はれたり、斯くして一

方には朝鮮事變の如き、臺灣征伐の如き、日清戦争の如き、北清事變の如き、頻々として國家の大事件起りし爲め、國民も漸く主我的と爲り、自主的と爲れり、現に當年歐化主義の權化を以て任じたりし有力なる新聞紙が日清戦争後俄かに大日本膨脹主義を唱道し來れるに徴するも、如何に國民の思潮が戦争の刺激によりて大變動を喫せしかを察するに餘り有らん。

然るに歴史は常に其れ自身を繰り返すものにや、近時此傾向は一部の社會に於て復た甚だしく弛み來らんとするを見る、今日文部省が外國に留學生を派するは、慶應年間初めて留學生の差遣有りて以來空前の盛況たり、而して之れと同時に私費を以て洋行する者も續々相踵ぐに至れり、是れ決して非難すべき事に非ず、否勿論今後尙獎勵す可き事也、然りと雖、此等の徒が其歸朝するに迫んで往々一種言ふ可からざる臭味を負ひ來り、其意氣甚だ沮喪し、其人格頗る見下ぐ可きもの有るを認むるは果して邦家の慶事なりとすべきか。

男爵金子堅太郎君は、曩頃米國に於て一場の演説を試み、日本は東亞に於ける「アングロサクソン」文明の養子として日露戦争に従事する旨を公言せり、(當時の時事新報參看)然れども吾人は自ら決して他國文明の繼續者を以て甘んずるものに非ざるを確信す、吾人は斷じて養子に非ず、別に文明上の新系統を啓かんと欲する者のみ、吾人素より氏に向て妄りに批難攻撃を企つる者に非ざれども、外國に遊ぶ者が往々氏の如き意見を有し、或は獨逸文明の養子たらんことを理想とし、或は佛國文明の徒弟たらんことを祈願するの模様あるは、日本文明の進歩の爲めに甚だ恨事とす可からずや。

若し予をして有體に言はしむれば、彼れの長を取りて我れの短を補ふ、固より當然なれども、其間には毅然として高く標置する所の氣概有り度きものと思ふ也、縦令國法の學問は獨逸に於て發達しつつ有るにもせよ、強いて彼れの原則を以て我れの獨特なる國體を説明するには迫ばずと信する也、日本の國家にして外國の國家學を以て律し得可からざる點あら

ば、宜ろしく世界の例外として我れは我れの解釋を取り説明を立て、差支無しと信ずる也、西洋の倫理は或は聽く可きの眞理無きに非ざる可し、然かも我れの固有の道義心と相容れざるもの有るに於ては、斷じて之れを排して可也、用ひずして可也、紹介せずして可なりと思ふ也、西洋の美術は或は大に見る可きもの多からん、然れども日本人の眼には彼れのみ美として認むる所のもの却て醜ならずとす可からざるもの無きに非ず、然るを強いて之れを傳へて無理やりに之れは美術なり模せざる可からずと言ふは、極めて愚かなる業ならずや、西洋の風俗習慣にして學ぶ可きものは固より多からん、併かも衣食住より男女交際の關係に至るまで、如何にも我れに適當ならずと思はるゝものは決して之れを踏襲する必要有るまじきに非ずや、外交官の夫人の緋の袴を穿つは、其短き軀に管笠大の「ボンネット」を戴だき不釣合の洋服を着くるよりも却て見上げた事ならずと謂ふの理由無し、汲々として夜會の「エチクエット」に氣を揉みたる結果辛ふじて失態無きを得んよりも、紅葉館の獨逸皇族招待會

に於ける東京市長のお流れ頂戴の方寧ろ一見識ありと謂ふ可からずや、西洋にて偶「アルヌボー」式の意匠圖案が大流行なればとて、我工藝家、競て輸出品に之れを應用せんとするは、服屬的の觀念也、國家の工業は決して此くの如くして發達し得べきものとは思はれず。

今の學者は何が故に邦文もロク／＼書けもせぬ者に向て博士論文の獨逸文によりて起草せられ佛蘭西文によりて認めらるゝを珍重せんとするや、吾人は當世の所謂學者を以て自ら任ずる者が實に自國の歴史に關し驚く許り無學なるを見し例甚だ多し、外國の學者才人に對しては親類の如く骨肉の如く、餘計なお世話と思ふまでに忠實なるも、自國の學者に對しては道路の人も及ばぬ程に冷淡なるを見し例頗る多し、日本人は「シルレル」百年祭を云爲するも曾て近松の爲に一本の線香を立てゝやる親切無きが如し、「ニウトン」の爲めには毎年理學者集まりて茶話會をも開くなるべし、外國御備教師の爲めには續々銅像も建立せらるべし、然れども伊能忠敬の爲めに果して何程の事をか爲せし、平賀源内の爲に果して

幾許の事をか爲せし、外國の學者の爲には高級の勳章を授け、其誕辰日には、遙かに祝辭を寄せ、非常に禮を厚くし誼を敦ふするも、山脇尙徳は依然として吳下の阿蒙的取扱を受け、杉田玄白は長へに我れ敢て關せず焉の態度を以てあしらはる、此等の士素より遠く外國の大家に及ばざる可し、又た或は科學者の眼中には由來國境なるものを認めざるやも知る可からず、然れども吾人は國家なる制度を以て人類の進歩に最も大切なる條件と確信するが故に、他國の學者に忠實なる割合に自國の大家に不親切なる人々の心事を甚だ歡ばざる也、然り確に此種の傾向を歡迎せざる也。

吾人の理想を語れば、日本民族が彼の奈良朝平安朝の時代に於て一時支那の急進的文明に壓倒せられしことを深慨すべき恨事也と思料す、然れども幸にして其區域の餘り大ならざりしが爲め、地方の健全なる分子によりて『心醉』より『醒覺』し、『跪拜』より『蹶起』したることを慶賀す、然れども當時の支那文明の崇拜は警むべきの殷鑑たり、吾人は國史の上に我

民族の文明の上に復たび此くの如きの不見識を敢てせず、卑屈を敢てせざらんことを祈る也、若し當世の知識的分子が彼遺唐學問の例に倣ひて、何事も他國好かれの主義を以て一も二も無く其宗教倫理を輸入し、文學藝術を吹聴し、甚だしきは彼れが浮華輕薄の風潮、淫靡猥褻の惡俗まで併せ齎らすが如き有らば、今日の社會は平安朝の社會に非ず、鐵道は全國に開通し、新聞紙は到る所に刊行す、中央の極端なる急進的の思潮は毫も地方に入て緩和せらるゝの暇を有せざる也、必らずや、大害を及ぼすべし、拯ふ可からざるの悔を貽すべし、深く戒めざる可からずと思ふ也。

吾人素より第二十世紀の今日に於て鎖國主義を唱ふるの愚を敢てするに堪へず、頑冥不靈なる御國自慢を竝らべて獨り好がりをして得々たらんとするに非ず、是れ言ふ迄も無き事也、泰西の學術素より輸入すべし、泰西の思想文藝素より採用すべし、基督教可なり、「ソシアリズム」可也苟も我れの文明に取りて營養となるべきものは皆な採りて之れを歡迎す

べき也、但だ飽く迄も日本文明の爲にする觀念を棄つること勿きを要す、單に白人の養子と爲りて、彼の文華を東洋に取次ぐ者と爲らざるを要す、我れは、仲買人に非ず、彼れの文明を買ひて之れを清韓に賣る者に非ることを忘る可からず、我れは單に消費者に非ず、彼れの文明を買ひ取りて只だ「ムシヤムチャ」を食ひ盡すを以て能とするものに非ることを忘る可からず、然れども我れは實に生産者たることを記憶せよ、日本が二千五百六十餘年の長き歴史の下に蓄積したる潜勢力よりして、驚くべき「スーパーク」を放たんが爲めに、我れは常に用意し常に準備しつゝあるものなるを記憶せよ、斯國民偉ならずんば豈詎んぞ陸に海に今日の如き大勝あらんや、黃禍と呼ばるゝも驚く勿れ、深く將來に恃む所有る國民は一時の誤解の如き毫も頓着すること勿れ、堂々として天の使命を奉ずる大國民たるの態度を以て政事に外交に社會に列國の感情の如き瑣々たる問題に齟齬するの風を有つこと勿れ、若し我れは飽くまで自己の文明を擁護し保育せんとするに方り、他より強いて之れを曲解し傷害をせんと

する者有らば、如何なる場合の下に於ても日本人は劍を把つて奮起せんのみ、最後の血の一滴に至るまでも誓つて國辱を排せんのみ、我二千五百餘年の歴史豈無意義にして了る可けんや。

第二十世紀式人物

時代の進歩と共に、機械は其容形漸く危大を致し、而して又た極めて細緻に組み立てらる、米國の大陸を駛りて、一時間五十哩の速力を出だせる複數十車輪式汽罐車は、往時の其れに比して翅だに其重量外形の大を加へたるのみならず、總ての機械學上の地位に於て著るじき複雑を示せる也、將た今日の戰闘艦は古人の曾て夢想だもせざりし噸數馬力を有するのみならず、其構造武器に於て亦た名狀す可からざる巧緻精細の關係を有し來れる也、商船此くの如し、紡績機具此くの如し、印刷機亦た此の如し、殆ど有らゆる文明の利器なるもの實に又た此の如し、人焉んぞ又た此の如からざる可けんや。

吾人は信ず、昔時の人物は粗にして大也、今日以後の人物は密にして大ならざる可からずと、世人或は緻密なる頭腦と偉大なる人格とは、互に相兩立せざるものゝ如く想像すと雖、吾人の觀念は然らざる也、曾て「エマルソン」は曰へり、文明の進歩は人をして小ならしむ、小ならしむると同時に、人をして殆ど不具者たらしむと、或は之を世態の實相に照らすに斯感絶無とせず、然かも第廿世紀の人物を以て目せらるゝ者は、昔時の英雄豪傑と比して寧一層の大人格を具ふ可き要有ると共に其頭腦や透明にして且つ精細なるもの無くんば非ず、夫れ近代の國家は其事業經營共に前日の比に非ず、即ち益々世界的に、滋々膨脹的に、且つ愈々永久的也、朝に在りて之れが政柄を執る者、或は野に在りて之れが重責に任ずる者、古人に比してヨリ大なる眼孔とヨリ強固なる意思とを有するに非ずして如何ぞ先づ斯の國家の大目的を遂行し得んや、文明の進歩と共に人物は必ず大ならざる可からず、而して其の取り扱ふ所の事項日を趁ひ時を趁ふて漸く複雑を加ふるに伴ひ、其頭腦や必ず綿密ならざる

可からず、是れ蓋し疑ふ可からざる時代の要求也。

然かも翻つて我政治界實業界を視るに何ぞ其傾向の時代的要求に悖るの酷だしき。維新以來國家の柱石を以て任せる豪傑兒は所謂粗にして大なりし者其後を承けて朝に立てる元老其他諸大臣に至りては先進諸豪傑に比して頭腦遙かに明敏にして緻密なるを看ると雖、其眼孔識量に於ては、多く一着を輸するの感無からず、而かも尙何處にか非凡なる點を有し、其人に會し其人の説に聽かしむる者をして、形容し難き一種の感興を催さしむるもの有り、然りと雖若し夫れ現今の大臣顯官の徒に至りては、渾然として是れ刀筆の吏、趣味も無く氣概も無く、唯だ其頭腦の徒らに細緻なるを看るのみにて、毫も危然として大洋を望むが如きの感を生ぜざる也、國家の局面日に愈よ難きを致すの秋、我日本を提げて五洲の舞臺に活躍せざる可からざる者、其の人格其の規模總じて此の如し、吾人は關心せざらんと欲するも得可からず、嗚呼戦後經營抑々末のみ、我日本、の急務とする所は先づ實に第二十世紀式の人物を要路に當つるに在り、

換言すれば頭腦精細にして人格偉大なる者を登用するに在り、然らずんば國家新興の氣運未だ以て容易に樂觀すべからざる也。

一三六

陳るくても尙新らしき疑問

▲群青を溶かした如き青海波の上に、浮び出たる日本の美しくしきことよ、山には富士が有る、淺間が有る、御嶽が有る、妙義が有る、鳥海が有る、白山が有る、大仙が有る、高千穂が有る、天地精粹の凝る所、那處に之くとしてか、佳ならざるは莫しで有る。

▲湖には碧瑠璃の如き琵琶湖が有る、「エメラルド」の如き中禪寺が有る、七寶燒の如き宍道湖が有る、半襟地の如き濱名湖が有る、古鏡の如き諏訪湖が有る、其他葦の湖がある、猪苗代が有る、雨奇晴好、孰れの時としてか、眺めて風情の面白からざるは無い。

▲木蘇の寢覺、宇治の米かし、千馬亂れ競ふが如き天龍の川上、萬雷轟き落つるかど怪まるゝ玖摩川の瀧つ瀬、春の吉野川、秋の耶馬溪、假し

や大陸の長江油の如く、悠久として天に連るの壯觀は無くとも、噴薄激邊の勢、到る處として入蜀記中の風景ならざる無く、取りて以て詩歌の材とす可く、收めて以て繪畫の料とす可しで有る。

▲若し夫れ地を穿てば、滾々として晝夜をすてざるの熱泉、其大なるものには、箱根が有る、鹽原が有る、伊香保が有る、草津が有る、有馬が有る、道後が有る、別府が有る、其の奇なるものには、即ち熱海の「ガイザア」が有る。

▲月の瀬の梅、芳野の花、日光の紅葉、松島の月、總べて是れ詩魂飛び吟思動くの景、一國の珍たる今更ら絮説を須るすで有る。

▲山には金銀有る、瑪瑙琥珀有る、海には珊瑚有る、眞珠有る、味の美なるものには、信濃川の鮭あり、利根川の鯉有る、長柄の鮎有る、近江の源五郎鮒有る、聖護院蕪有る、櫻島大根有る、三河島有る、備後の水蜜桃有る、紀州蜜柑有る、臺灣の「バナナ」有る、北海道の櫻桃有る、盛岡の林檎有る、將た神戸牛なるもの有り、鳴門鯛なるもの有り、灘伊

丹の 酒有り、流山の醤油有り、又た何をか求めんやで有る。

▲而して西京には京美人なるもの有り、新潟には越の肌なるもの有り、名古屋には西鶴の所謂尻肥へたれど棄て難き代る物有り、春宵一刻、千金を不廉とせざるもの、亦た何ぞ乏しからんやで有る。

▲素より政事家も有る、驍將も有る、學者も有る、文士も有る、畫師も有る、書家も有る、彫刻家も有る、又た藝人もある、力士も有る。

▲政事家には伊藤侯山縣侯大隈伯など、好かぬけれども兎に角一代の傑物である、東郷大山黒木乃木などいふ人々に至ては、驍名世界に隠れなきこと、言ふも愚ろかで有るふ、一々數へ立てるも際限のない話だが、大學教授の中には世界の學界に名を知られたる人も鮮なくない、森槐南の詩、高崎正風の歌、露伴逍遙の筆、孰れも當代の人氣物に相違なく、雅邦玉章鳴鶴之恭光雲雪聲の徒亦た恐くは得難きの材で有るふ、而して攝津大椽の淨瑠璃、林中の常盤津、伊十郎の長唄、六左衛門の三味線、必ずしも敢て故人に劣るもので無く、然り而して天下の力士常陸山の金

剛力に至りては、洵に是れ古今獨歩の概が有る。

▲日本の山水は其れ此くの如く美に、産物は其れ此くの如く豊かに、美人も傑物も亦た尠なしとせざることを、則ち以上言ふが如し、但だし其れ何爲れぞ斯の國土に一人の精神家を有せざるや、一人の熱血男子を有せざるや、吾輩は之れを以て、現在に於る我日本の最も大なる缺乏と爲し、最も大なる不満足と爲すので有る。

▲いろ／＼の化學的成分を採りて、之れを一處に蒐めて置けば、其間には雑多な化合物が出来る、結晶物が出来る、或は水も出て來よふ、或は半流動體のものも出て來よふ、打ち砕く可からざる固形物も生れよふ、透明なる寶石の如きも現れよふ、或は瓦斯も立つたらふ、或は火も發するたらふ、又た藥にもなるものが有るふし、甚だしく毒にもなるものも見出されよふ。

▲人間社會も其通りだ、風土なり氣候なり人種なり歴史なり又た周圍の事情なり、宗教なり教育なり文學なり美術なりといふ様なものは、謂は

ば社會の化學的成分の如きものだ、其間からして、いろ／＼と平凡な人間も風變りの人物も、才子も豪傑も、皆な生れて來るので有る。

▲そこで現在の日本には、水の如く空氣の如き、無臭無味、至て平凡凡たる人間は、素より到る處に存在する、又た液體か固形物か、不得要領の人物も、鵠の内閣も、鼠色の政黨も、悉く具備して居る、或は金銀寶石の如く、キラ／＼して眩しい様な、才子も佳人も、澤山有る、或は炭酸瓦斯の如き亞硫酸の如き、毒性の猛烈な詩人殺しや縮屋殺しも續々居る、又た相應に藥にもなる學者や君子人も決して其人に乏しとす可からずだ。

▲け○れ○ご○も○火○の○如○き○熱○血○兒○が○無○い○、「○ア○ン○モ○ニア」○の○如○き○警○醒○者○が○無○い○、「○ニ○ト○ロ○グ○リ○ス○リ○ン」○の○如○き○發○憤○家○が○無○い○、○此○萎○靡○せ○る○社○會○の○心○臟○に○向○て○其○鼓○動○を○高○め○る○所○の○「○カ○ム○フ○ホ○ル」○の○如○き○充○奮○劑○が○無○い○、○此○墮○落○せ○る○時○代○の○思○潮○に○向○て○其○腐○爛○を○喰○ひ○留○め○る○所○の○「○グ○レ○オ○ソ○ト」○の○如○き○「○チ○ノ○ソ○ル」○の○如○き○防○腐○劑○が○無○い○。

▲今日の露西亞に在ては、「トルトストイ」の如き、實に彼れが「アンモニア」で有る、「ゴルキー」の如き、實に彼れが「ニトログリスリン」で有る、又た英國に在りて救世軍の「ブリス」大將、米國に在りては禁酒會の「ウイラード」女史の如き、共に彼れが「カムフホル」精たり、「チノソール」たる可き人で有る。

▲落花再び梢に上らず、福澤翁一たび逝きて、誤れる物質主義功利主義天下に充ち、新島氏一たび去りて、御用記者官房長を首めとして、甚だしきは、朝鮮三界へ出掛けて一攫千萬金の計を講せんとする際物師の輩出を見る、舉世滔滔として是れ權門の走狗、所謂成功の奴隸、亦た一人の高山彦九郎にすら造ぶ人格を認め無い。

▲一世の木鐸たる新聞紙は全國を通じて日々幾十萬の多きを印刷し發行すれども、唯だ穩健にして老成といふ態度が、然らざれば冷嘲惡罵の文字を陳らべるのみで、理想も熱情も絶へて見る可からず、又た一代の儀表を以て處す可きの學者連は、己れ達の力で日露戰爭でも起した様な顔

附をして居る者も有れど、扱て職を辭するとか辭せぬとかいふ場合にな
るど、摺つた揉んだの揚句が、其の出處進退極めて曖昧、若し夫れ一國
の大臣に至りては、野に在りて前日まで大々の苦情を鳴らし反對論を振
廻しても、一旦臺閣に入るや、グーもスーも言はぬといふ有様で有る。
▲何處に精神が在るか、何處に氣骨が有るか、斯んなことで日本の國運
は興り得るといふか、ア、陳るい様で此疑問はマダ新らしいのだ。

惜む可き三個人

星亨と近衛公と西郷侯と、此三人が最近數年間に、相前後して物故したのは、日本に取
りて無量の損失で有る、近衛公と西郷侯とは或は握手し得た人で有るふ、若し握手して
日露戦争を遣つて排ける様なことに成つて居たら、決してポーツマスの失敗は無かつた
で有るふ、星亨は政黨を墮落させた男で有る、けれども政黨を滅ぼす者では無かつた、
彼れの心臓が尙十年間鼓動を續けて居つたならば、何ぞ山縣侯が天下を我物にする如き
ドチな事が起るふぞ。

明治三十九年三月十八日印刷
明治三十九年三月二十一日發行

大觀小觀
正價金四拾錢

不許複製製

著作者 笹川 潔
發行者 辻本 卯藏
印刷者 金澤 求也
印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地
東京市日本橋區南大工町一番地

發兌 東京市日本橋區南大工町壹番地 弘道館
關西 大賣捌 大坂市東區南本町四丁目 會社積文社
特約

弘道館圖書雜誌大賣所

東京市神田表神保町一番地 東京堂
 東京市京橋區中橋廣小路 前川文榮閣
 東京市神田區錦町一丁目 修文館
 名古屋市本町三丁目 川瀨書店
 大坂市東區安土町四丁目 積善館本店
 福岡市博多中島町九番地 積善館支店
 廣島市鹽屋町 積善館支店
 久留米市米屋町 菊竹金文堂
 熊本市上通り三丁目 長崎次郎

好評積々の教育書

廣島高等師範學校教師吉田 信次先生作曲
 廣島高等師範學校教師原 誠先生作曲

國定 唱歌遊戯教授書

尋常科之部
 高等科之部

福岡縣師範學校 主事 藤田勝馬先生 共著
 長崎縣立高等女學校 教諭 白土千秋先生 共著
 小學生 兒童 劣等生 救濟の原理及方法

洋装刺繍美本全書
 正價金六拾錢 郵税金六錢
 白土千秋先生河部清見先生共著

國定 算術教材資料

尋常科の部 上下全三冊

戰勝國少年有益讀物

樋口勲次郎先生著 國觀 成美書局
 正價金拾錢 郵稅四錢

熊襲征伐
 東吉先生著 國觀
 正價金拾錢 郵稅四錢

日曜讀本
 農學士若村清尚先生著 國觀
 正價金拾五錢 郵稅四錢

米の話
 樋口勲次郎先生著 春汀齋
 正價金拾五錢 郵稅四錢

日本の覺悟
 正價金拾五錢 郵稅四錢

弘道館圖書雜誌大賣所

東京市神田表神保町一番地 東京堂
 東京市京橋區中橋廣小路 前川文榮閣
 東京市神田區錦町一丁目 修文館
 名古屋市本町三丁目 川瀨書店
 大坂市東區安土町四丁目 積善館本店
 福岡市博多中島町九番地 積善館支店
 廣島市鹽屋町 積善館支店
 久留米市米屋町 菊竹金文堂
 熊本市上通り三丁目 長崎次郎

好評噴々の教育書

廣島高等師範學校教師吉田 信太先生作曲
 廣島高等師範學校教師原 藤 藏先生作技
 國定 唱歌遊戲教授書

洋裝菊判金版彩色敷度摺類 美本
 ▲尋常科之部 正價八拾錢 郵稅八拾錢
 ▲高等科之部 正價八拾錢 郵稅八拾錢

醫學博士 瀨川昌著先生 校
 福岡縣師範學校主事 織田勝馬先生 校
 長崎縣立高等女學校教諭 白土千秋先生 共著
 小學 劣等生救濟の原理及方法

洋裝菊判美本全壹冊
 正價金六拾錢 郵稅金六錢
 白土千秋先生阿部清見先生共著

國定 算術教材資料 刊近
 根據

尋常科の部 上下全二冊

戰勝國少年有益讀物

樋口勘次郎先生著 國觀 成美書伯書
 強い日本 全一冊 菊判形 頗美本

樋口蘭林先生著 宮川春汀書
 歴史 熊襲征伐 全一冊 菊判 美本

東基吉先生著 國觀書
 日曜讀本 全一冊 菊判 頗美本

農學士吉村清尙先生著 國觀 禾月書
 米の話 全一冊 菊判 頗美本

樋口勘次郎先生著 春汀書
 日本の覺悟 全一冊 菊判 頗美本

正價金拾五錢 郵稅四錢

新刊既成

文學博士 姉崎潮風先生著

國運と信仰

洋裝四六本
美一册
全一册

正價金壹圓

大國民とは何ぞや、國運の隆替は何に支配せらるるか、國民の理想を實にする信仰の力は何れに求むべきか、而して日本國運の將來、世界文明の將來は如何なる理想に歸着すべきか、此等の問題に對して著者の懷抱を告白したる本書は國運の問題に焦慮する憂世者の一讀を求めて現はれたり

近刊豫告

文學士 北澤定吉先生新著

十偉人耶蘇

三月下旬發兌

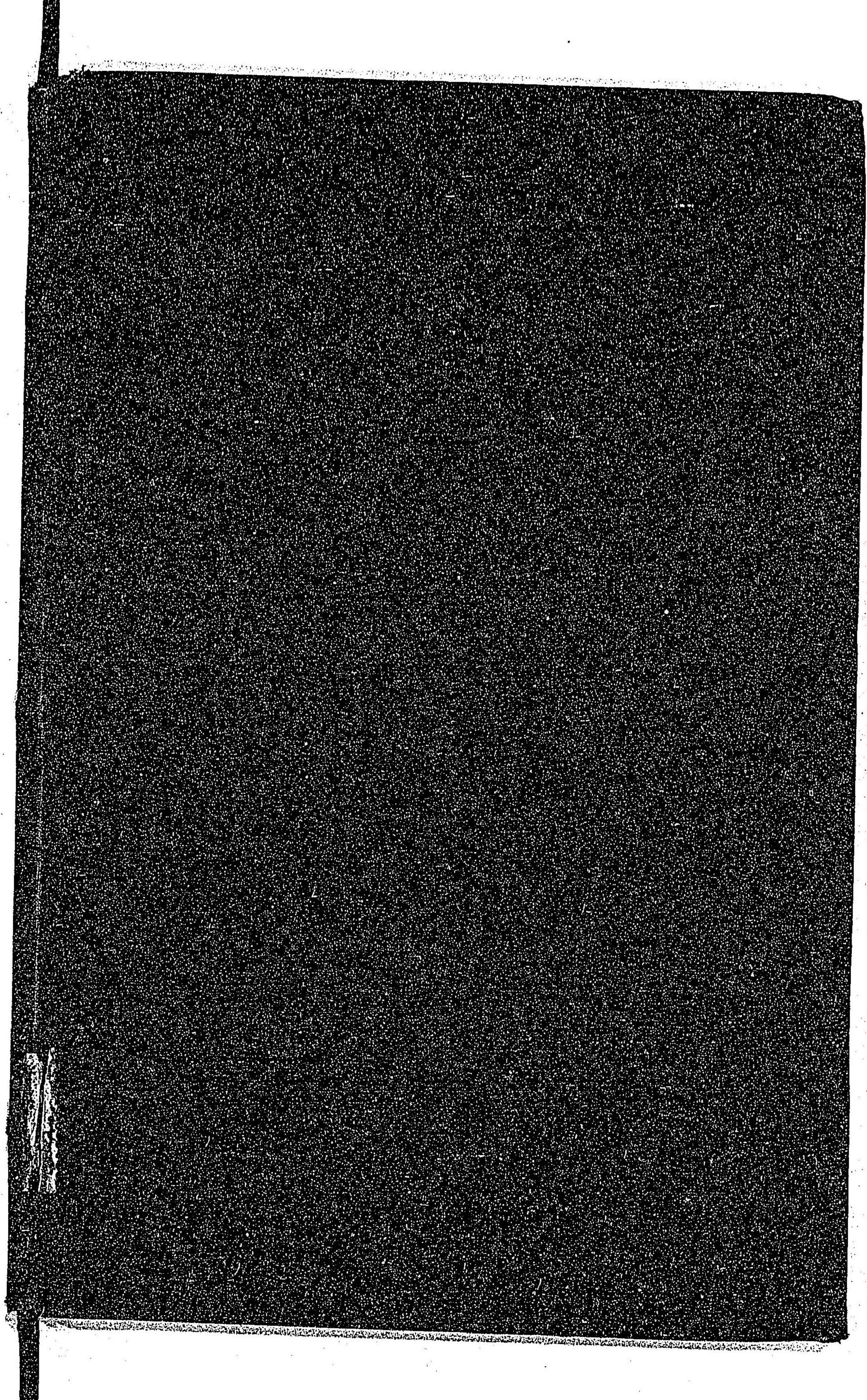
○洋裝菊版 全一册

紙數凡三百頁

發兌元東京弘道館

33

570





102153-000-9

33-570

大觀小觀

笹川 潔/著

M39

EAF-0149

